

Der letzte Panzer IV

ZK

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦車道が安全な“競技”へなる前、まだ“戦争”だった時。

支援戦車として作られたものの、主力戦車へ昇格し、そしてドイツ第3帝国最期の日まで戦い抜いたIV号戦車。

そんなIV号戦車と共に戦場を駆けるは、

戦車至上主義の車長、バーサーカー1歩手前の砲手、ツツコミ（できるとは言つてない）の操縦手、元整備士の装填手。

そんなIV号戦車に、通信手として、新兵ハンナが配属される。彼女らはこの大戦争を生き残れるのか？

ノルマンディー上陸作戦から終戦までを描く、5人のお話。
12 / 1 あらすじ等少し変更を加えました

目次

登場人物紹介のような何か | 1

着任 | 9

D | d a y (2) | 23

カーン防衛戦 | 34

チャーチル戦 | 49

フアレーズ・ポケット、入口こじ開ける編 | 73

フアレーズ・ポケット、入り口閉じさせない編 | 81

死の森 前編 | 92

死の森 後編 | 99

乾坤一擲の大作戦編 | 112

クリスマスプレゼントは爆弾ですか？編 | 124

練度って大切な編 | 136

転戦辞令は突然に編 | 151

登場人物紹介のような何か

・世界観(?)

ほとんど史実の第二次世界大戦。(学園艦とかの設定は・・・思いつかなかったです。) 戦車道という武道が誕生すること、それのもととなった陸軍女性騎兵隊が存在し、戦車兵、或いはそれ以外の兵種も女性の進出が大きい。特に戦車兵は女性軍人の花形とされ、名誉とされた。

なお特殊カーボンや特殊な砲弾なんて便利なものは(まだ)無い。
つまるところ、戦車がまだ”戦争の機械”だったころの物語です。

・登場人物紹介

〔プロフィール〕

エリカ・ホフマン

ドイツ国防軍のIV号戦車の戦車長と小隊長を務める少尉。北アフリカからの古参兵で、歴戦の兵士として部下の信頼が厚い。しかし奔放な性格で自他共に認める変人でもある。

例えば戦車兵以前に、兵士である癖にすべて戦車で解決しようとする節があり、その度に副官や先任下士官から叱られている。だが面倒見の良さを見せたりスタイルも良かったりと、何だかんだで部下や上官からは慕われている。

実家は農場。黒森峰の新隊長とは関係ない。

朝はギリギリまで寝てたいタイプ。

【経歴】

7月30日生まれ（24歳）

身長：168cm / 体重：51kg

好きな物：バウムクーヘン

嫌いな物：権力で威張り散らすタイプの奴

銀髪のセミロング

【プロフィール】

シャルロット・シユミット

エリカのIV号戦車の砲手を務める曹長。エリカとは北アフリカ戦線からの付き合い。スラツとした長身だが、3サイズが控えめなのがコンプレックス。性格も、普段は大人しく引つ込み思案気味。だが、仲間と認めた人には幾らかフランクになる。優秀な砲手として沢山の命を刈ってきた為と、少しバーサーカーに片足を突っ込んでいる罪悪

感から、戦場で果てることを密かに望んでいる。

朝は余裕をもって起きるタイプ。

【経歴】

5月1日生まれ（23歳）

身長：172cm／体重：52kg

好きな物：ザワークラウト、祖国に残した親きようだい

嫌いな物：数学、どこかで殺しを楽しんでる自分

丸メガネに1本結びの銀髪

【プロフィール】

エマ・クラウゼ

階級は伍長。エリカのIV号戦車の操縦手。エリカとは幼なじみで、エリカの後を追って戦車兵となった。巻き毛が特徴で空間把握能力に長ける。古参兵3人中では一番まともなツツコミ役（のはず）。明るく社交的な為ハンナと妹のように接する。

朝は余裕をもって起きるタイプ

【経歴】

9月27日生まれ（24歳）

身長：157cm／体重：50kg

好きな物：チーズケーキ

嫌いな物：代用コーヒー

黒髪ロング

【プロフィール】

マリア・シュナイダー

階級は一等兵。エリカのI V号戦車の装填手を務める。元は整備中隊の整備士だったが、人員不足と北アフリカでの師団の壊滅の混乱で戦車兵となった。後輩たるハンナの着任が嬉しいらしく、歳が近い先輩として振舞おうとする。5人の中で1番I V号戦車の構造について詳しく、力も強い。

朝は直前まで寝てたいタイプ。

【経歴】

12月20日生まれ（21歳）

身長：154cm / 体重：45kg

好きな物：ソーセージパン

嫌いな物：揚げ物

栗色のショートヘア

【プロフィール】

ハンナ・ノイマン

階級は二等兵。エリカのI V号戦車の通信手になった新兵。元々は電話交換手をしてきたが、戦線の拡大に伴い戦車隊に配属された。まだ実戦経験はない。

恐慌の中、0から電話や無線のことを学んで電話交換手になる程の精神力があるから戦場への慣れは極めて早く、仲間とも打ち解けて認められるが、他方異常な早さでの慣れに関して心配もされている。

朝は時間に余裕をもって起きるタイプ。

【経歴】

8月31日生まれ（19歳）

身長：141cm / 体重：41kg

好きな物：チョコレート菓子全般

嫌いな物：虫系全般

金髪碧眼、三つ編み

・その他

ドイツ軍

? エミリア（ノルマンディー編）

エリカ戦車小隊の4号車の車長。北アフリカ戦線では補充として来るはずが船を沈められてイタリアで留守番をしていた。とはいえエリカに次ぐ実力者。

上手く生き残っていたが、チャーチル歩兵戦車の砲弾を砲塔後部に受けた際にミンチになった。

? SS 偵察大隊長（ノルマンディー編）

ファレーズで死にかけのエリカたちを救った女神の長。あそこに来るまでにヤーボ（戦闘爆撃機）の攻撃を S d . k f z 252 / 2 のドリフトで躲けてたりする。

がその後バストーニュの戦いでシャーマンジャンボの重装甲に呆然としたところを愛車ごと50口径ブローニングで蜂の巣にされミンチよりひでえことになる。

? 新米砲手（死の森編）

ファレーズで死にかけたシャルロットの代わりに戦場へぶち込まれた戦闘処女その1。どこかのシャルロットみたいにはならず、人を殺すのを躊躇う。しかし「殺らなきゃ殺られる」と念じたお陰で撃てた。が、覚醒しきる前に頭に風穴を開けられて戦死。

? 新米装填手（死の森編）

操縦手になったマリアの代わりに装填手として放り込まれた戦闘処女その2。仲良しの同期の新米砲手が討死した光景で覚醒して某シャルロット方向にふつきれた。後に別の車両へ異動。砲手となり今もウォーモンガーとして恐れられている。

? 降下猟兵の少尉 (アルデンヌ攻勢編)

エリカ達のI V号戦車隊にデサントして進撃した降下猟兵の少尉。マルタ島での戦いに参加した古株の猛者だが、英語が壊滅的に出来なかった為に特殊作戦には呼ばれなかった。

エリカ小隊と別れた後、バスターニユへ北上する米第3軍のM4に対してパンツァーファウストで数両撃破するなど奮闘したがVT信管付き重砲で粉微塵にされた。

? 中隊長 (アルデンヌ攻勢編)

エリカ達の戦車中隊長の長。少々堅物なところがある。中隊が壊滅したことからヤケ酒に手を染めつつある。

英軍

☆英国淑女 (ノルマンディー編)

チャーチル歩兵戦車Mk. VIIの車長の人。紅茶キチな為、ダンケルクからの撤退でも紅茶を欠かさなかったとか。ちゃっかり脱出したので生存。最近は難所を踏破して補給部隊を潰しまくってるという。

チャーチルクロコダイルにも興味を示しているとか。

聖グロリアーナ女学院の隊長は (多分) 無関係。

米軍

☆金髪ウエーブの指揮官（仮）（アルデンヌ攻勢編）

短砲身75mm型のM4A1の車長。北アフリカで初実戦を迎え、騎士道精神に則つて同数で戦おうとして危うく戦線を突破されかかるといふ戦犯一步手前のことをやらかすが、その後は各所で転戦しつつ、活躍して挽回する。

が、数で押しつぶすのは好みでは無い模様。

☆ベリーショート（仮）（アルデンヌ攻勢編）

M4A3E8の砲手。まだ車両転換から日が浅いものの、金髪ウエーブとは北アフリカからの戦友。V号戦車パンターのショットトラップでの連続撃破記録がいつ途切れるかで賭けが行われている。好物はチューインガム。

☆（味方の）無線傍受してた車長（仮）（アルデンヌ攻勢編）

76mm砲搭載型のM4A1（76）Wに乗る車長。よく敵無線や電話を傍受しての待ち伏せ、先回りetcを行う為、盗聴癖を疑われている。もちろん、傍受も含めて戦術的にも策士である。最近彼氏が振り向いてくれないのが悩み事。

d e m n · c h s t . . .

(Coming soon . . .)

(逐次更新)

着任

—1944年6月6日—

ノルマンディー地方特有の生垣の横に、I V号戦車の小隊と、乗員達が身を休めていた。彼らは近く行われるであろう連合軍の上陸に対応する為にここに集っていた。

「ブリトンたち、ほんとにくるのかな？」

装填手のマリア一等兵が呟く。最近の彼女らは平和そのものだったからだ。

「どうせすぐ来るよ。」

砲塔に座っていた砲手、シャルロット曹長が丸メガネを拭きながら応える。

「このままI V号戦車とのんびりしてるのも良いけどねえ。」

操縦手のエマ上等兵が車体ハッチの上に寝そべる。通信手ハッチも塞いでしまいが、通信手は補充されていないので問題ない。

すると彼女らと小隊を纏める車長、エリカ少尉がやって来た。

「まあ、そう言わずに待とう。来たらずぐに出迎えられるように。」

「ああ、そうだ。補充の通信手は？その後ろの人？」

エマが尋ねると、エリカは頷き、後ろにいた新兵を前に出させた。

「あ、あの、ハンナ二等兵です。よろしくお願ひします。」

ハンナ二等兵はまだ幼さが残る金髪碧眼の少女だった。

「こちらこそ、よろしくね!」

マリアは後輩が嬉しいのか真つ先に反応を示した。

「へえ、よろしく。」

シャルロットが丸メガネを押し上げた。

「あ、ありがとうございます!」

「ハンナちゃんかー、じゃあハンナちゃんだね。私はエマだよ。」

「私はシャルロット。よろしくね。」

「わ、わたしはマリアです!よろしくおねがいね!」

三人が自己紹介を始めると、ハンナは嬉しそうに微笑んだ。

「ふふ、みんな良い人達ですね。」

ハンナの言葉に三人とも照れたように笑う。

その時、無線機から声が聞こえた。

『敵襲!!敵襲!!至急戦車の支援を要請する!!』

「来たぞ!!」

小隊全員に緊張が走る。

『敵は空挺兵多数！コマンド共だ！』

「全車戦闘準備!!」

エリカが叫ぶと同時に、全員が行動に移る。

「各員、乗車完了しました!」

「よし、行くぞ!!」

I V号戦車が動き出す。

「戦車前進!!」

彼女らにとっても、一番長い日が始まろうとしていた。

「あれが噂の……!」

連合軍空挺部隊の兵士の一人が双眼鏡越しに、ドイツ軍の機甲部隊を発見した。ドイツ軍の装甲兵力は、連合軍にとってまさに悪夢だった。彼らはドイツ領内深くまで侵入しており、もはや退路はないに等しい状況にあったのだ。そして何より、彼らにとって目の前には戦車こそが恐怖の対象であった。

「fuck! 戦車だぞ!」

同僚の兵士に声をかけられ、彼は双眼鏡を手取る。

「ああ、クソっ！おい誰かPIAT持ってこい！」

「私やるよ！」

「いや、ここはあたしがやる！」

「お前らはいいいから早くしろっ!!」

彼らが慌ただしく動く中、ドイツ軍部隊は進撃を続けていた。

「なんだか騒がしいね……。」

「そうですね……」

I V号戦車の中で、車内通話装置を通して二人の少女の声が聞こえる。装填手のマリアと通信手を務めるハンナである。彼女達は狭い空間で息苦しうにしながら会話をしていた。

「どうしたもんかねー。」

「うう、なんかちよつと怖いです……」

「大丈夫だよハンナちゃん。いざとなったら私が守るからね。」

「あ、ありがとうございます……！」

二人がそんなやり取りをしているうちに、

「いや、マリアは装填手なのにどうするってのさ？」

とエマがツツコミを入れた。

「別に良いじゃないですか。．．．その為の拳？」

「でも、確かにこの狭さだと厳しいかも。」

ハンナが言うのと、マリアはむっと頬を膨らませた。

「えー!?ハンナちゃんまでそんなこと言うの〜?」

「ごめんなさい、そういう意味じゃなくて．．．!」

ハンナが慌てて否定すると、マリアが笑いながら言った。

「冗談だつてば。でも、実際そうだった時の為に、覚悟決めておいてね。」

「よし、ちょうどお話が終わったところで、奴さんをおもてなしするぞ。小隊各車、撃て

!」

途端、エリカ少尉麾下の4両のIV号戦車は主砲と機銃を闊達に撃ち始めた。

砲弾が敵の歩兵部隊のど真ん中に着弾し、爆発が巻き起こる。榴弾が炸裂して吹き飛ばされた兵士が宙を舞う。

「ひゃあ、すげえ．．．!」

エマが感嘆の声をあげる。

「当たった。ハハハハ!」

シャルロットが照準器を覗きながら言う。

彼女の父は元々砲兵科の将校であり、彼女自身も北アフリカで磨いた射撃の腕は確かだった。

「・・・」

しかし舞い上がった兵士の残骸を見たハンナは息を呑んだ。あれが今まで生きてた人間なのか？と。

「大丈夫、慣れれば平気になるさ。」

エリカのその言葉を聞いたハンナはぎゅつと目を瞑り、心を落ち着けようとする。

するとI V号戦車の砲弾や機銃弾に混じって、何か飛翔体が飛んでくるようになってた。

「PIATだ！シャルロツテ、今から言う辺りに榴弾を撃ち込め！」

エリカの指示に、シャルロツテが返事をする。

「小隊各車、PIATの返礼が来るから榴弾でつつ返すよ！」

「了解！」

「わかりあした！」

「アイ！」

3両の小隊各車長も返事をし、PIATを持った歩兵を探す。

「ちい！流石に当たらないか！」

未だ遠いのもあってI V号戦車は回避運動を行う。それを見た連合軍の兵士の一人が舌打ちをした。

「もつと引きつける。合図するまで堪えてP I A T兵は隠れてろ。」

「無理だ！75mm砲でふっ飛ばされちまう！」

「ああくそ、わかった。おい、その3人！余ってる対戦車火器を持つてついてこい！」
兵士は仲間を数人連れて、陣地を離れた。

「ほらほらー、美味そうなI V号戦車がいますよー？」

エリカがキューポラから外を見ながら言うが、なかなか敵の対戦車兵が出てこない。

「美味そうって・・・。」

ハンナが困惑しているのも気にせず

「砲塔1時、距離300。榴弾装填。」

と指示を出していく。

「照準よし！いつでもどうぞ！」

「撃て!!」

ドオン！という音と共に、榴弾が発射される。放物線を描きながら飛ぶ榴弾は、見事

に敵兵がいる地点に着弾した。

「ぐああっ！」

「畜生！まだだ！」

何人かの兵士が叫び声を上げながらも反撃してくる。だが、I V号戦車にダメージを与えるには至らない。

「よし、次いくよー。」

と、次の攻撃目標を定めようとしたその時だった。

「!? 10時に敵兵ツ!!!」

エマが叫ぶ。

「チイツ！車体、砲塔回せ！弾種榴弾!!」

エリカが咄嗟の判断はエマもシャルロットも予想していたようでI V号戦車がぐわんと旋回する。ハンナの目に、収束手榴弾を構える兵士が映る。

「間に合え・・・!!」

ハンナは咄嗟に目の前のMG34の引き金を引いた。

「・・・ハンナ、良い判断だよ。」

シャルロットの言葉で目を開けたハンナは、機関銃で撃ち抜いた敵兵が倒れているのを見つけた。

「・・・え、あ、ありがとうございます。」

ハンナは一瞬呆然として、とうとう自分も命を手にかけてしまった。という罪悪感と、生き残ったことの安堵と、複雑な気持ちを抱いた。

「気にしないの。ハンナちゃん。」

エリカはそんな彼女を慰めるように言った。

「私達は軍人だからね、戦わなきゃいけないんだ。そうしなければ殺されてしまう。」

ハンナはその言葉を聞いて少し落ち着いたのか、再び照準器を覗き込んだ。

「・・・はい!」

そして、先ほどと同じように近付いてきた歩兵に向かって機関銃を撃ちかける。今度は隠れられてしまうも、

「シャルロット!」

「発砲!」

今度は75mmの榴弾が残った敵兵を吹き飛ばす。

「奴ら対戦車装備で固めてたぞ。よくやった。」

エリカが言うと、

「小隊長！敵兵が後退していきます。」

と2号車が報告してきた。

「追撃するから全車突っ込んで、ケリを付ける。」

途端、無線機から声が響く。

「少尉殿、中隊本部から、・・・カーンへ集結せよ。と。」

ハナナが報告するとエリカはため息をつきながら言った。

「わかった。各車、撤退していく敵を深追いしないように。」

「了解しました。」

ⅠⅤ号戦車はその場で最後に1発ずつ榴弾を発射すると、エリカはⅠⅤ号戦車の後ろについていた歩兵に

「集結命令が来た。悪いけど下がらせてもらおうよ。」

と言うと、歩兵は少し残念そうな顔をしたが、

「まあ聞いた話じゃ、海岸にも敵が来てるようだしな。・・・了解、支援感謝する。よしよく聞け！今度こそ我々でここを守り通すぞ！」

そう言うのと歩兵達は塹壕へ戻っていく。その後、エリカ達のⅠⅤ号戦車小隊も、カーンへ向けて移動を始めた。

「・・・カーンまで戻ってきたのに、まだ反撃しないのか?」

シャルロットが言うように、カーンに戻り、補給を済ませたエリカ達は未だに待機を命じられていた。

「さつきまで師団長がサン・ローでパーティと洒落こんでたんだって。他の装甲師団も動けていないらしいし。」

ハンナと共に無線を聞いていたエマが言うと、

「はあ、天候が悪かったとはいえ、うちの師団はどんだけ呑気なんだか。」

とマリアは呆れた。

「まあ、いいじゃないですか!今はこうして無事待機してるんですから!」

そう言うと、通信手席のハンナは地図を広げた。

「それにしても、まさか大西洋の壁のある海からの上陸とは・・・考えもありませんでしたねえ。」

ハンナはしみじみと言った。

「ん?もしかして大西洋の壁がちゃんとしたものがあるって?」

エリカが言うと、ハンナは驚きの目で海岸の方を見た。彼女を初め、多くのドイツ兵

は知らなかったが実際には大西洋の壁と呼ばれた要塞線はほとんど完成していないお粗末なものだったのだ。

「ええ!?!無いんですかあれ!!」

「うん、ないよ。」

ハンナの問いに、あつさり答えるエリカ。

「そもそも今ドイツは東でも戦つてるからこつちに回される資材が限られる。ま、何も
ないよりはマシつてところかな?」

「そ、そりやそうですけど・・・。」

ハンナは困つた顔をしながら言った。

「大丈夫だよ、壁はなくても壁はあるからね。」

「はいい!?!」

「またもやわけのわからないことを言うエリカにハンナは困惑した。」

「ほら、見てみなよ。」

とエリカはシャルロツテの胸を触つた。

「ひゃつ!?!」

「ほら、絶壁。ハツハツハツハー。」

エリカは笑うが、場はしーんとした。

「……」

「……」

「……」

「……コロス」

無言の圧力が場を支配する中、シャルロットがボソツと呟き、ホルスターに手を伸ばす。

「ごめんなさい許してくださいお願いします。」

即座に早口で謝るエリカ。

「じゃあ北アフリカ戦線からのよしみということで一億万マルクで手をうちましょう。ローンも可です。」

シャルロットはそういった直後、

「……今ライヒスマルクだ。アハハハハハ！」

と笑い、エリカやエマも笑い始めた。

「あれ……なんか意外と変な人達かも……？」

疑問を呈するハンナ。

「じきに慣れるよ。」

とマリアに言われる。

「あ、もうすぐ作戦開始時刻ですつて。」

ハンナが無線からの情報を言うと、皆が静まり返った。

「そうか。私達も行くとするかね。」

「はい！」

エリカの言葉で全員戦車に乗り込むと、I V号戦車の群れは海岸へと向かって隊列を組んだ。

D—d a y (2)

「各車、敵は近いはず。気をつけて。」

エリカがそう促す。

「了解。」

と2号車が返事をすると同時に、前方のボカージュから発砲炎が見えた。

「来たぞ！全車散開！」

その言葉とともに、I V号戦車達は一斉にバラバラに動き出した。

「各車、戦闘用意！」

エリカはそう叫ぶと、双眼鏡を覗く。

「P a kだ！榴弾装填、砲塔1時。」

草むらに隠蔽されている6ポンド対戦車砲は防楯の大きさが見えない為、エリカ達は距離を判定できずにいた。

「撃て！」

エリカの指示で榴弾が発射され、同時に車体を左へ滑らせる。それのお陰で直撃コースだった敵の砲弾は地面に突き刺さるに終わった。

直後にこちらの砲弾が着弾する。

「クソツ、外れた！仰角0・5上げ。」

とエリカが悔しそうにしていると、無線で連絡が入る。

「こちら3号車、11時方向距離800に敵戦車をかくに！きゃああああ!!!」

砲弾が突き刺さった3号車が火を吹きながら明後日の方向へ曲がる。車体の操縦手は即死してしまったのだろう。

「ぎゃああああ!!!熱い!!!熱いよおおお!!!」

絶叫と共に砲塔から燃え盛る乗員が転がり出てくる。随伴していた歩兵が駆け寄るも、もう手遅れの様だった。ハンナは悲痛な叫びに、ただ耳を塞ぐしかできなかった。

「クソツ！やられた！奴らの砲撃が正確すぎる、もつと距離を詰めるんだ！」

とエリカが指示を出すと、

「り、了解」

という声と共に小隊は前進し始めた。

「小隊各車へ、3号車の仇討ちだ。距離200、弾種煙幕弾。目を潰したる。」

「照準よし。」

「装填よし！」

「撃てー！」

放たれた煙幕弾は煙を上げながら飛んでいき、少しして炸裂した。

「うわっ!？」

「なんだこれ、前が見えない!!」

対戦車砲兵達が混乱している間に、エリカは小隊に

「各車一気に距離を詰める！」

と前進を命令した。

「煙幕!? 突っ切りますわよー！」

アメリカからのレンドリース品のM10 GMCを駆る英軍兵士は撃ち込まれた煙幕を避けるため迂回し始めた。側面装甲は薄く、砲塔旋回速度も遅いが、IV号戦車程度なら一撃で粉砕できる火力を活かすためだ。

「あいつら、バカか? こっちには煙幕があるのによ。」

とドイツ兵が嘲笑すると、別のドイツ軍兵士が言った。

「いや、あの車両は確か……。」

「ん?」

「ああくそ、敵戦車だ！」

ドイツ軍の兵士たちはオープントップのM10に手榴弾を投げ込もうとするが、なかなか上手くないかない。

「なんでこんなに接近されてるの!?!」

ハンナは焦りの声を上げる。

「落ち着いて、まだやられちゃいないよ。」

とマリアが落ち着けるように言う。

「そうですけど……」

「大丈夫。その前に粉微塵にしてあげる。」

シャルロットはそう言うと同軸機銃を撃ち、ドイツ軍歩兵を銃撃していたM10の車長を制圧した。

「弾種徹甲弾! 距離至近! 撃て!!」

エリカの命令によって発射された砲弾は吸い込まれるように命中、M10を炎上させた。

「やった……のか?」

撃破を確認する間もなく次の目標に狙いを定める。

「次はあそこ、あの茂みに隠れてるやつ！」

とエリカは指示を出し、榴弾を放った。

「うおおお！」

「助けてくれえ！」

と叫びながら出てきた敵兵を射撃しつつ、更に前進させる。

「今のうちだ、突っ込め！」

煙幕が晴れてきてきて発砲炎がはつきり見えるようになると、I V号戦車は英軍の対戦車砲の目の前にいた。

「うわ！退避！退避——！」

「そのまま踏み潰せ！」

兵士が逃げ出して無人になった6ポンド対戦車砲を踏み潰す。

「各個自由射撃！シャルロット、3時方向の敵対戦車砲を！」

エリカは次々と指示を出すと、2両目の6ポンド対戦車砲を撃破した。

「隊長！7時方向から砲撃！今度はM4です！」

「チイ！また面倒な奴が来たね！全車、散開！徹甲弾装填、砲塔1時！」

とエリカが指示を出

し、シャルロットが砲塔を指向する。

「装填完了！」

「撃て！」

放たれた砲弾は真っ直ぐ飛び、M4シャーマンの正面装甲に命中し、内部の弾薬庫を巻き込んで炸裂した。

「撃破だ！次、3時方向のM10！」

とエリカは叫ぶが、その前に敵弾が飛来する。

「危ない!!」

咄嗟の判断で車体を左へ回し回避するも、車体に砲弾が着弾した。

「クソツ！頭が回らない！砲塔旋回装置破損！」

シャルロットが悪態をつく。エリカが舌打ちをすると、更に凶報が来た。

「こちら2号車！敵の増援gグギャー！」

「こちら4号車、敵の増援です。2号車が吹っ飛びました！」

と無線が入ってくる。2号車は弾薬庫の誘爆で一瞬にして全滅したようだ。

「クソツ！撤退だ！撤退！全速で離脱しろ！」

エリカがそう指示すると、2両に減ったIV号戦車はありつたけの発煙弾で煙幕を張った。

「乗れ！撤退するぞ！」

周囲に残っていた歩兵もかき集めてエリカ達はその場を後にした。

「こちらグロリア3。ドイツ軍が逃げていきます、追撃しますか？」

「いえ、既に彼女らも私たちもかなり血を流したわ。今の追撃は危ないのでは無くて？」
増援としてやって来たチャーチル戦車の戦車長はそう言つて紅茶をおおった。この時、エリカ達の所属する師団は海岸への突破を目指すものの失敗。一方的に戦車20両近くを失い後退した。

「こちら4号車。車体の損傷自体は戦闘に支障はありませんが、乗員全員大なり小なり負傷しています。」

「了解。せっかく生き残ったんだから、ヤバくなつたら言いなさい。」

エリカはそう最後の僚車に言った。

「隊長、これからどうするんですか？」

とハンナが聞くと、

「とりあえず、近くの町に行くよ。そこで修理と情報の整理。それから本隊に合流するわ。」

エリカはそう答えた。

「それにしても、あの煙幕は効果大だったね。」

とマリアが言うのと、

「歩兵達も発煙手榴弾で追い煙幕してくれて助かった。」

とシャルロットも続けた。

「俺らも拾って貰えて助かった。あのままじゃミンチにされるとこだった。」

「デサントさせた味方歩兵も言った。「まあ、何にせよ生き残れてよかったですね……」
ハンナは安堵の声を出した。

エリカ達一行は近くの村落にたどり着き、小休止を取ることにした。無線によると、
どうやら他の隊も強力な英軍に当たって一方的に大損害を受けて、師団は混乱している
様だ。

ⅠⅤ号戦車に草木を被せて偽装して、一行はようやく一息ついた。

「しかし、本当に酷い目にあつたな……。まさかこんなところでイギリス軍にぶち当た
るとは思わなかつたぜ。」

とデサントさせていた歩兵の一人が愚痴る。

「師団の他部隊が負けたのも納得ね……。あれだけの戦車に、対戦車砲まで持つてたら
そりゃ勝てない……。」

とエマが言うのと、皆同意するようにため息を吐いた。

「ま、とりあえず今日は生き延びた。それだけよ。」

エリカはそう言つて、ワインを取り出して掲げた。どうやら村落で買つてきた様だ。皆で飲もう。」

そう言つたエリカに、

「1人分は？」

とハンナが聞いた。

「あんたのぶんは無いよ。だつて未成年でしょ？」

とエリカが返すと、

「ひどい！私はちゃんと成人ですッ！」

とハンナが叫んだ。

「冗談だよ。ほら、これでも飲みな。」

そう言つてエリカは自分のグラスを渡した。

「隊長優しい……」

とハンナが呟くと、エリカはニヤリと笑つて、

「何か文句あるかい？ん？」

と返した。

「いえ！何も無いです！」

とハンナは慌てて首を横に振った。

「まあ、私も今日はちよつとキツかったかなと思つてたんだよ。」

「そうですね。」

とハンナはうなづいた。

「2号車のマルタ達も、3号車のイルゼ達も良い奴だったよ。……それより、この村で情報収集しよう。明日からどうするか考えないと。」

エリカはそう言つて、話題を変えた。

「そうですね。無線で何か情報あるか探してみます。」

とハンナが無線を手に取った。

「いや、待つてくれ。無線は使わない方が良いかもしれない。」

とデサントしていた歩兵の一人が言う。

「どうしてですか?」

とハンナが尋ねると、

「傍受される可能性があるからさ。ここはフランス領内だからね。何なら敵軍も近くにいるからな。」

と言つた。

「なるほど。確かにその可能性はありますね。」

とハンナは無線を戻した。

「とりあえず、今晚はこの村に泊まって明日の早朝、カーンに出発だ。」
エリカが指示すると、全員が了承した。

カーン防衛戦

「撃てー！」

放たれた榴弾は、通りの向こうを右折してきた敵の歩兵集団を文字通り消し炭にした。

「敵歩兵は後退！助かったぜお嬢さん方！」

MP40を持っていた分隊長と思しき歩兵が礼を述べる。

「これは貸しにしとくよ。」

とエリカは言うど、無線からまた声が聞こえる。

「こちら第3小隊！攻撃されてる！直ちに戦車の支援が必要だ！」

声の後から銃声や砲撃の音が聞こえる。

ハンナはエリカに取り次ぐ。

「了解、Kameradin！今向かう。」

そうエリカは返すと、先の反攻時に唯一残った4号車に

「よし、第3小隊の救援要請だ。敵の配置は不明。エミリア、左折して向かう。前進！」

と指示する。

「了解、小隊長。」

「エヴァ、私たちが戻るまで、第1小隊とここを守って。」

「りよ、了解ですっ!」

補充された新2号車は頼りなげな返事を返すが、ここにいる第1小隊は4号車と同じく共に生き残った歴戦の兵士だ。きつと彼女らを援護してくれるはずだ。

「行くぞ! Panzer vor!」

エリカがそう言うのと、

「まだ戦闘ですか!?!」

とマリアが疲れを隠さずに叫ぶ。確かに、ずっと75mm砲弾と同軸機銃の装填をしてきたのだ。

「ハハハ。仲間を助けに行くのさ。」

とエリカは言った後で、こう付け加えた。

「それに、私たちは戦車兵でしょ?」

エリカ達一行は第3小隊の元へ廃墟と化した市街地を進んだ。途中、幾度か銃撃を受けるが、どれも小口径の豆鉄砲で、戦車を傷付けるほどの威力は無かった。

「敵戦車は見えませぬね．．．」

とハンナが言うと、

「そりやこの視界だもの。多分、あっちも苦勞してるわ。」

とエマが返す。ハンナは車体の機銃で、無謀にもこのⅠⅤ号戦車に小火器で立ち向かつてきた敵兵にMG34の弾幕を見舞う。

「そーいやさハンナちゃん、戦場に慣れるの早くない？」

とシャルロットが照準器から目を放さずに言った。

「え、そんな事無いですよ。」

とハンナは答えたが、事実であつた。彼女はつい2週間程前までは新兵だったので、今の彼女からはそのような雰囲気は全く感じられない。

「まあ、それだけ死線をくぐり抜けてきたってことだろうね。」

とエリカが言った。

「そうですね．．．」

ハンナは少し複雑な表情を浮かべながら答える。

「今思えば、着任当日に連合軍が上陸して、2回も戦つて、初めて人撃つて、そして僚車の死を見るってなかなかハードスケジュールですよね．．．」

とマリアが言った。

「そうですねえ、私もあの頃は、度々嘔吐したり、眠れなかったりしたんですよ。」

とハンナは思い出す様に話す。

「でも、慣れていく。どんな状況も。最初は怖くて仕方無かったけど、今はそうでもないです。」

とハンナは続けた。

「ハンナ、良い顔するようになったじゃない。」

とエマが言うと、

「いやあ、それほどでも・・・」

とハンナは照れる。

「いや、褒めてないからね？」

とエマは呆れながらも笑った。

「もうすぐ第3小隊の所へ着きますよ！」

と4号車が言った。

「お、あそこの廃墟突っ切れば短縮できる。エミリア！突っ込むよ！」

とエリカは言った。

「敵がいらないといいんですが・・・」

とマリアが心配そうな声を出す。

「大丈夫よ、あの辺りにはもう敵はいないはず。」

とエリカは返した。

しかし、4号車からの報告でそれが変わる。

「Schei・e! (くそ!) 9時方向にM4! 車体、砲塔回して!」

4号車の車内無線で敵戦車の存在を知る。位置関係で考えれば、こちらからM4が狙えない以上、4号車は側面に攻撃を受けて爆散するだろう。と推察したハンナは、その自らの薄情ぶりに気づき、罪悪感を覚えた。「撃てえ!」

4号車から聞こえた声は震えていた。

「命中!」

「よし! 次弾装填急げ!」

「間に合うか!」

ハンナの予想とは違って、あちら側にとつても不意遭遇だったようで、先手を取られたM4シャーマンは煙を吐きつつ発砲するが、その砲弾を弾いた4号車の砲弾が命中した次の瞬間、爆発炎上し、残骸へと姿を変えた。

「やったぜ!」

と4号車の乗員が叫んだ。が、直後追いついたエリカは、

「エミリア！まだ敵戦車がいる！」

と、撃破したM4の他にもう1両いることを知らせた。

「嘘でしょ!？」

と4号車の乗員が驚く。その時、建物の裏を迂回してきたと見られるM4が現れた。「砲塔1時！4号車の背面の盾になる！」

というエリカの指示で、エリカ達のI V号戦車が車体を斜め、通称昼飯の角度にして射線に割り込み、M4の砲弾を弾いた。

「助かりました！」

と4号車から無線が入る。

「発砲!!」

直後シャルロッテが徹甲弾を至近距離からM4の正面装甲に撃ち込んだ。

「撃破！撃破!!」

エリカはそう言うと、付近に敵戦車がないことを確認して再び進み始めた。

「こちら第3小队！援護はまだか！」

「今右翼の敵勢力を排除してる。状況は？」

エリカが無線で会話するも、一瞬相手の反応が途絶える。がしかしすぐに

「戦車だ！戦車と交戦中！砲塔が箱みたいな奴だ！」

と返ってきた。

「了解した！そいつのことはよく分らんが、もう少しでそっちの敵の側面に出る！もう少しだけ耐えて！」

「わかった！野郎ども！良いとこみせてやろうぜ！」

第3小隊と話しながら、エリカ達は第3小隊が交戦中の場所まで向かった。すると、前方に2両のM4戦車が見えた。第3小隊への攻撃に気を取られて、側面を晒している。

「弾種徹甲弾！撃て！！」

「発射！」

エリカのIV号戦車と4号車の75mm砲弾はM4の側面を易易と食い破った。

「こちら第3小隊！敵戦車2両の撃破を確認！あと火を吐いてるドラゴン奴が1両いる。頼めるか！」

「マリア、砲弾の残数は？」

エリカに尋ねられたマリアは砲弾ラックを確認する。

「徹甲弾2発、榴弾3発、あと発煙弾が1発です。」

その答えを聞いてエリカは

「よし！引き受けた！弾薬と燃料があれば戦車はすべて解決できる！」

と返答した。

「はい!？」

反応したのはハンナだ。戦車を撃破するには徹甲弾が必要だが、2発では到底敵わないと思ったからだ。

しかし、そんなハンナを無視してエリカは指示を出す。

「エマ、M4がいたところを左折して。シャルロット、砲塔9時。」

「あいよ。」

「砲塔9時、了解!」

エマもシャルロットも特に言わずに指示に従う。

「でも一旦戻って補給を・・・」

言いかけたところでエリカが

「うるせえIⅤ号戦車ぶつけんぞ。」

言った。

「うえ・・・」

ハンナは黙り込むしかなかった。エリカはそれを見てバツが悪そうに、

「・・・やっぱりさ、戦ってる仲間を置いてけないよ。」

と続けた。ハンナはそれを聞いて、はつとした。仲間を助ける。どうして前までは当

たり前だったことを私はもう忘れていたのか、と。

「すまん。言い方も悪かったよ。ちよつと焦ってた。」

エリカが頭を搔きながら言う。

「装填よし！」

「そうですね。覚悟決めました！」

ハンナはそう言つて笑つた。

「照準よし！」

そして先程のM4と同じく第3小隊に気を取られている敵戦車の背面に、必中の間合
いから徹甲弾が放たれた。

「ん？こいつなんか荷車引いてるよ？」

エマの発言通り、敵戦車の後ろに荷車のようなものがくつついており、そこに命中し
た徹甲弾は、その荷車を巨大な火柱に変えた。

「な、なんだ!?!チャーチルの奴、ケツに火がついたか!?!」

シャルロッテが焦つたように言う、敵戦車が回頭してきた。その車体正面からは火
炎放射器が放たれていた。

「なるほど、火炎放射器戦車か。次弾装填。決めてシャルロッテ。」

感心したようにエリカが言うと、

「もちろん！」

とシャルロットが返事をする。

「装填良し！」

「撃て!!」

シャルロットの放った徹甲弾が火炎放射器戦車の側面装甲を貫いた。

「うわ！燃えています！」

「マジですの!?!消火しますわよ！」

「いやここは脱出・・・!!?」

敵戦車を撃破した後、火炎放射器の燃料が誘爆したのか、敵戦車は爆炎に包まれた。

同時に車内から炎に焼かれて火だるまの状態敵の戦車兵が飛び出してきた。

「ぎゃあああ!!!」

「ひいい!!」

「早く!!誰か助けてえ!!」

「熱いよお!痛いよお!!死んでしまうよおおお!!」

「水!水をおお！」

そんな叫び声を聞きながら、エリカ達はその場を去ろうとした。

・・・が、ハンナはMG34の引き金を引いて、未だ火だるままでのたうち回る敵戦車

兵を撃った。

「ハンナ……」

「……すみません。でも、戦車に乗っていた兵士は、きつとこんな風に苦しんで死ぬんだとわかったんです。だけど、私は同じ戦車兵として、彼女らを苦しませないでおきたいんです。」

そう言うと、ハンナは震える手でなおも銃を撃ち続ける。敵味方の死には慣れた。しかし、いつか生きて焼かれるのかもしれないと考えると、ハンナは震えが止まらなかつた。

「ハンナ……ホントに大丈夫か？」

エリカが呟くと、

「私は大丈夫です。行きましよう少尉。今はただ前を向いて進むだけです。」

ハンナがそう言った。

「……そうだね。行きましよう。」

マリアの言葉で、エリカ達はまた進み始めた。

こうして第3小隊と合流したエリカ達は、第3小隊の面々から歓喜の声で迎えられた。

「戦車だ！」

「天使の降臨だ！」

「ちくしょう！助かったぞKamerad（戦友）！」

湧き上がる歩兵達に、エリカがキューポラから身体を乗り出し、

「待たせたな！戦車様のお通りだ！！ハハハ！」

と拳を突き上げてみせた。シャルロットやエマも口角が上がっている。

「あ、危ない！」

エリカを狙ってか、キューポラ辺りに何発か敵の小火器の弾が当たる。マリアはエリカを車内に引き戻そうとしている。

ハンナも、ペリスコープ越しに見える歩兵の喜びぶりに、少し得意になった。

しかし流石に徹甲弾が尽きた為、その後一度補給に帰ることにした。

「じゃあ私はここで失礼するよ。また会おう。」

「ああ！助かったぜ！今度一杯奢らせてくれ。」

「いや、お易い御用さ。ふふふ。」

第3小隊と別れたエリカ達は補給物資の集積所へ向かった。徹甲弾を撃ち尽くし、燃料も沢山は残っていないかった。

「あー、結構弾薬消費したねえ。」

シャルロットが少し疲れたような声で言った。

「そうですね。榴弾も残り少ないですし。」

マリアが言った。

「ま、仕方ない。弾薬と燃料があれば戦車は全て解決できるからね。……にしても、北アフリカでもそうだったが、あの歓喜の声を聞く瞬間はたまらねえ、へへへ。」

そんな会話をしながらエリカ達と4号車は物資集積所へ戻ってきた。

「補給を頼む。弾薬がほとんど空なんだ。」

「はいよ。」

補給担当の兵士と協力して、先程までの装填作業で、命が刈り取られそうな顔になったマリア以外で砲弾と燃料を補給する。エリカはふと思いついたかのようにハンナに尋ねた。

「そういえばさ、ハンナってなんでこの部隊に入ったの？ 志願？」

「え、私ですか？」

ハンナは少し戸惑った表情を見せた。

「うん。私も気になる。」

シャルロットも便乗する。

「……正直言うと、私はあまり戦いが好きではありません。本当は、通信科に希望を出

したんです。でも、先に入隊した友人達が、紙になって戻ってきたり、大怪我して帰ってくるのを見ました。それを見て私は、自分だけ後方任務の兵科になるのが辛くなつて、友達に胸を張れるようになるためにも、戦車兵に．．．！」

ハンナは静かに答えた。
「そっか．．．。ごめん、嫌なこと思い出させたかな。」

エリカがそう言うが、
「いえ、全然平気ですよ！」

とハンナは笑ってみせた。

「よし、これで全部だな。」

補給担当の兵士が言う。

「ありがとうございます。」

敬礼するエリカに、補給科の兵士は辺りを一瞬見回すと、小声で言った。

「あまり大きな声じゃ言えないが、まともな補給が受けられるのは今日中だけかもしれない。」

と言った。

「．．．どういうこと？」

「実は昨日、司令部への無線連絡の時にちらりと聞こえたんだが。英軍はヴィレル・ボ

カージユも攻撃して、こちらを包囲する気らしい。今はまだ備蓄があるが、敵機のせいで補給も滞ってる。」

補給科の兵士は淡々と語った。

「・・・うーん。」

エリカは思わず言葉を失った。

「だから、早めにここを出た方がいいと思うぞ。」

「わかった。忠告ありがとう。」

補給を終えたエリカ達はすぐに出発した。また救うべき戦友が現れたのだ。

それから3日間、エリカ達はカーン市街地で激戦区を転々としながら戦った。戦車の装甲を貫く対戦車砲や、M4戦車などの敵も撃破したが、この3日間の戦闘で、敵は圧倒的な物量と航空攻撃による補給路の遮断で、ジワジワとエリカ達ドイツ軍を退けていった。

そしてついに、カーン近辺を始めとするドイツ軍の大部分は包囲される危険に陥った。そこでドイツ軍はなけなしの機甲師団で包囲の突破を計った。

チャーチル戦

「よし、よく聞いて。」

I V号戦車の近くで、エリカは自らの小隊車の車長を集めてブリーフィングを開いていた。

「はつきり言って、私たちは包囲されている。」

補充されてきた新兵達は顔を強ばらせる。

「だからこそ、私たちはその包囲の網を食い破る。」

地図に指を乗せ、エリカは街道に沿って進ませる。

「私たちはこの十字路を確保して、友軍の退路を確保する。味方は重装備をかなぐり捨てて、早ければ明日にはここを通過する。」

重装備を放棄、つまり砲兵による支援砲撃も望めない。

「でも大丈夫。明後日には武装SSの装甲師団が外側から来てくれる。」

私達はこれまで沢山の戦闘を乗り越えてきた。きっと生きて帰ろう。」

「了解!!」

全員が一斉に返事をする。

「良し！じゃあ行こう！」

こうして、エリカ率いるⅠⅤ号戦車の小隊は前進の準備を整えた。なけなしの弾薬と燃料を分配したが、完全に腹を満たす量では無かった。

「私たち、死んだも同然では？」

マリアがボヤクように言った。

「うるせえ、戦車ぶっけんぞ。戦車はすべて解決できるんだよ。」

エリカが戻ってきて言った。

「そうだね。まだ諦めるのは早いよ。私たちが道を開いてくれていると信じてる味方がいるんだ。」

とエマが言った。

「その期待に、応えなきゃいけませんね。」

ハンナもにこやかに答えた。

「味方の命も掛かるとなれば、尚のこと外せないねえ。」

とシャルロットが言う。

「・・・そうですね。そしてハンナちゃんがやる気なのに、先輩としてカツコ悪いもんね

！」

とマリアも納得した様子だった。

「……さあ、行くよー！」

そしてエリカの合図と共に、再び4両となったIV号戦車のエンジンが一齐にかかった。

「「Panzer vor!!」」

「……良かった。ヤーボは飛んでない。」

エリカは空を見ながら呟く。

「そいつは良かった。流石に飛行機には当てられないしなあ。」

シャルロットが言った。

「今の内に十字路が見える範囲位までは近付きたいわね。」

とエマも続ける。

「あ、近くに家屋もある様ですからマトモな布団で寝れるかもしれませんね。」

とハンナが地図を見ながら言った。

「……いや、それはどうかな。」

エリカは少し考えるような仕草を見せると、

「敵はその十字路を確保して待ち伏せてる可能性もある。もしその家屋に敵が籠ってたら榴弾で吹き飛ばさなきゃならない。」

と言った。

「・・・確かに、それもそうですね。」

ハンナは残念そうな表情を浮かべる。

「でも、まずは十字路まで行かなきゃ。このままじゃジリ貧だしね。」

エマが言うのと、

「・・・だな。」

とシャルロットもうなづいた。マリアは手を合わせて何か唱えている。

「ベッドで寝れますように・・・。」

I V号戦車の砲塔上、エリカはキューポラから身を出して偵察している。戦車の中と
いうのは、どうしても視界が狭くなるからだ。

「やっぱり居たか。」

M4が2輜ほど左手の林の向こうを進んでいた。その片方はかなりの長砲身だ。

「どうする？ー1発撃ち込む？」

とシャルロットが聞いた。

「うーん、ちょっと待ってて。」

エリカは双眼鏡を取り出すと、敵の方をじっと見つめる。そして、M4に変わった動きが無いのを確認すると、

「砲撃に自信のある奴は？」

と無線で問いかけた。

すると、意外にもすぐに返答があった。

「こちら4号車、私なら大丈夫ですよ！」

「任せてください！」

と、4号車の車長と砲手、2人の声が聞こえてくる。

「分かった。じゃあ頼むわね。」

そう言ってエリカは

「今、左の林の向こうに2両いる。4号車は前の奴、短砲身の方。私たちは後ろの長砲身の奴をやる。」

と言って指示を出した。

「了解！」

4号車のが答える。

「弾種、徹甲弾。目標、先頭の敵車両。」

そしてゆっくりと息を吸って、

「撃てっ!!」

と叫んだ。

ドンツ!!という砲撃音と共に、砲弾が先頭のM4の側面を撃ち抜いた。

「撃てー!」

「待つてました!」

続けて放たれた砲撃も、もう1両のM4を撃破した。エリカは4号車に賞賛を送る。

「命中!命中!よく当てたよ。」

「はい!ありがとうございま...。」

しかし4号車の返信は直後聞こえた風切り音で途絶えた。

続いて、ドオン! という爆発音が聞こえる。

「...え?」

呆気にとられたエリカだったが、

「全速後退!!」

と叫んで車内に戻った。

「何が起こった!?!」

「砲撃です！4号車が吹っ飛びました！」

「多分3時方向です！」

僚車の報告を元に、3時方向を探ると、チャーチル戦車がいた。

「見つけた！3時方向、発煙弾装填！」

そして発射しようとした瞬間、

「敵、発砲！」

「回避！」

エマは咄嗟に車体を右へ急旋回させる。砲弾は砲塔側面のすぐ側を通過した。

「撃て！」

「了解！」

シャルロットが発煙弾を撃ち出す、僚車の発煙弾も加わり砲撃が止んだ。だがチャーチル戦車を倒した訳では無い。またすぐに攻撃してくるだろう。

「・・・クソッ。」

エリカは小さく毒づく。

「どうしますか？」

ハンナが聞く。

「十字路まで行くには奴を始末しないと。」

エリカは答える。先程の4号車みたいに後ろから撃たれることはなんとしても避けたい。

「でも相手は1両で鈍足。撒こうと思えば撒けるのでは？」

「・・・奴の正面装甲は150mm程ある。奴を放っておけば、撤退する味方に被害が出る。」

「・・・そうですか。」

ハンナは残念そうな顔を見せたが、すぐに元の表情に戻ると、
「分かりました。やりましょう。」

と言った。

「・・・分かった。エリカが言うならしょうがない。」

エマは静かに答えた。

「ただ、回り込むには距離がありすぎる。それまでに・・・」
シャルロットがそこまで言いかけて止める。

「誰かが犠牲になる・・・ですか。」

そう続けたマリアは一瞬天を仰いだ。

「でもね、作戦があるわ。」

エリカがそう言うと、全員の視線が向かった。

「あら、茶柱が立ったわ。こんなことわざを知っている？『茶柱が立つと、素敵な訪問者が現れる。』」

一方、I V号戦車をI両撃破したチャーチルMk. V I I戦車に乗る英国淑女は紅茶を飲んでいた。

「お言葉ですが、もう5名ほどヴァルハラに送られました。素敵かはさておいて・・・本当に向かってくるでしょうか？」

紅茶のお代わりをつぎながら装填手が言った。残った3両のI V号戦車は発煙弾を撒いて十字路まで無理やり進むのではないかと心配だったからだ。

「さあ？どうかしらね。」

ティーカップを片手に持った車長が答える。

「でも、もし来たら・・・。」

「ええ、歓迎してあげないと。」

そう言うと彼女は口元を歪めた。

「戦車前進！」

チャーチル戦車は排煙を吐きながら前進を始めた。

「まだ撃たないで。もう少し引きつけてから。」

「了解。」

エリカの指示通り待つと、チャーチル戦車はじわりじわりと距離を詰めてくる。

「よし今だ！撃て!!」

3両の戦車が一齐に徹甲弾を放った。その全てが狙い通りに直撃する。

しかしそこはチャーチル戦車。正面の152mm装甲にその砲弾は受け止められてしまう。

「流石は英国製ね。」

エリカは少し感心すると、

「全速前進！回り込めた奴は側面か背面にぶち込んで！」

と言つて、突つ込むように命令を出した。

「了解！」

シャルロットは素早くギアを入れると、アクセルを踏み込んだ。

だが、敵も黙つてはいない。砲塔を旋回させると、こちらに向けて砲弾を放つ。

ドオン！ 車体が大きく揺れる。

「大丈夫？」

「問題なし！」

シャルロッテはそう返すと、すぐに照準を合わせて射撃を行う。

ドン！という砲撃音と共に放たれた砲弾は、チャーチル戦車の正面装甲を傷つけるのみに終わった。

「チッ！」

舌打ちをしながら、次の装填を待つ。

その間に、チャーチル戦車の砲塔は3号車へと向きを変えていた。

「・・・3号車！狙われているぞ！！」

「!!？」

砲弾が着弾して、砲塔から顔を出していた車長の頭が吹き飛んだ。

「・・・サンドラが殺られた！」

砲塔上から車長が吹き飛ばされた3号車を見て、エリカは呟く。

「・・・クソッ！」

エマは悪態をつく。

「チャーチルの砲塔を狙え！距離450！」

「やってみる！」

エリカの指示にシャルロッテが答える。

「撃てー！」

砲弾はチャーチルの砲塔に当たったが、その厚い装甲に阻まれた。

「クソっ！硬芯徹甲弾でも試すかい!？」

シャルロットが言うように、このⅠⅤ号戦車には硬芯徹甲弾Pz. Gr40、APCRがⅠ発積んである。貫通力は通常の徹甲弾より上がるものの、貫通後の加害力で劣る。何よりこの西部戦線では貴重だ。

「いえ、やめましょう。貴重な砲弾です。それに今は……」

ハンナの言葉にエリカが続ける。

「……そうね。無駄遣いはできないわ。」

そう言うのとエリカは通信機のスイッチを入れた。

「全車に到達。これより敵に突撃し、これを撃破する。」

「良いね、最高だ。」

シャルロットが口角を上げながら言う。

「無茶苦茶だな！」

エマが叫ぶ。

「でもそれしかないでしょう?！」

ハンナが言った。

「そうね。……皆、覚悟はいい？」

エリカが聞く。

「とつづくに覚悟完了！」

「はい。」

「もちろんです。」

マリアと僚車2両からの返事も聞いてエリカは静かにうなずくと、

「行くわよ！パンツァーフオー！！」

と叫んだ。

3両に減ったIⅤ号戦車は一斉に動き出した。

ありつただけの燃料でエンジンをふかし、発揮できる最高速度でチャーチル戦車に迫る。

「来るわね。」

英国淑女はキューポラのハッチを開けると、上半身を出して双眼鏡で敵を捉えた。

「……あら？あれは……」

彼女の視界に入ったのは、上陸作戦当日に、自分が逃がした小隊長車のIⅤ号戦車だ。

その右端にいるⅠⅤ号戦車の車長もこちらを睨みつけている。

「・・・ふうん。目標、左端のⅠⅤ号戦車。」

彼女はニヤリとすると、車内に戻った。

「撃てー！」

エリカの命令で3両のⅠⅤ号戦車が砲弾を放った。

ドオン！と砲弾が着弾する。

「・・・ダメか。」

「硬いですね。」

3両の戦車が放った徹甲弾は、チャーチル戦車の正面装甲を貫けなかった。

「側面に回り込め！」

エリカの命令通り、3両の戦車は方向転換をして側面を狙う。

「攻撃。」

今度は英国淑女の声と共に放たれた75mm砲弾が車長を失った3号車の砲塔装甲を撃ち抜き、3号車は砲塔内の弾薬が誘爆し砲塔は紙細工のように吹き飛んだ。

「チッー！」

エリカはその光景を見ながら、再びチャーチル戦車に向き直った。

「次弾装填急げ！」

「はい！」

「もう1発喰らわせてやる！」

シャルロッテが叫びながら、マリアが砲弾を装填する。

その間にも、2両は側面を狙いつつ距離を詰めていく。

「距離300！」

シャルロッテの報告を聞いて、エリカは

「よし、奴の左から突っ込め！私は右から、これで終わらせる！」

と言った。2両のI V号戦車が同時に2方向に別れる。

「装填完了！」

「撃ち方始め!!」

2発の砲弾が放たれ、チャーチル戦車に命中するが、またしても正面装甲は75mm砲弾を受け止めてしまう。「クソッ！硬すぎる！」

「まだ！もう少し！」

エリカの叫び声に、シャルロッテが反応して、車体を大きく揺らしながら、更に距離を縮める。

「・・・あと少し・・・」

シャルロットが呟いた時だった。

「I V号戦車近付いてきますー！」

操縦手の動揺に英国淑女は

「慌てる必要はないわ。落ち着いて対処なさい。」

と冷静に答えた。

「は、はい・・・」

「目標、I I時方向のI V号戦車。弾種徹甲弾。」

「了解しました。」

彼女が指示を出すと、砲塔が旋回して照準が合わさる。

「攻撃。」

その言葉と同時に、チャーチル戦車の主砲が火を吹き、砲弾が放たれる。

「避ける!!」

砲弾は一直線に2号車に向かっていくと、正面装甲を食い破った。

そしてそのまま弾薬庫まで進み、爆発を引き起こした。

「・・・やられた。」

そう呟くとエリカは車内に戻る。

「最後は私たち!?!」

エマが焦りを隠さず叫ぶ。

「それともチャーチルが先か。ですね。」

ハンナも冷や汗をかいている。

「シャルロット、どう?」

エリカの問いにシャルロットは砲塔を旋回させながら、

「そろそろ側面が見える。この距離なら抜ける。」

と答えた。

「・・・行くわよ。」

エリカは覚悟を決めた表情でそう言うと、

「エマ、そのまま突っ込んで!」

と叫んだ。

「さっきのお返しだ!」

そう言ってシャルロットが放った砲弾は、チャーチル戦車の左側面に命中し、貫通こそしなかったものの、フェンダーの一部を削り取った。

「次弾装填急いで！このまま押し切るわよ！」

エリカ達のI V号戦車は再び速度を上げて突撃した。

「なかなかやりますのね？」

チャーチル戦車車長、英国淑女は衝撃でも紅茶をこぼさず言った。

「敵が真つ直ぐ向かって来ています！」

「右へ回頭。脇は見させてはいけないわよ。」

英国淑女は冷静な声で答える。

「は、はいー！」

運転手の返事を聞くと、彼女はハッチから頭を出し、敵を見た。I V号戦車の車長と英国淑女は互いを睨みつけた。

「狙われていますー！」

ハンナはそう叫び、MG34を撃ち放った。当然装甲板は貫けないで、数多の火花が散るのみだ。

「攻撃。」

英国淑女の声とともにチャーチルが撃った。その砲弾はI V号戦車の砲塔右側面のシユルツェンを弾き飛ばしたが、撃破には至らない。

「うおおおおおお!!?!?!」

マリアが叫び声を上げるが、装填が終わった。

「ハッチだ！ハッチを撃て！」

エリカの命令で75mm砲弾が放たれ、チャーチルの車体側面のハッチ付近に命中する。

「次弾装填急げ！」

「は、はい！」

「装填完了！」

マリアの報告にエリカは

「撃て！」

と言った。砲弾はチャーチル戦車の側面装甲に着弾し、装甲板の一部を破壊するが、やはり撃破には至っていない

「!?、停止!!」

エマが急ブレーキをかけると同時に砲弾が車体前面装甲を跳ねていく。

「危な!?!」

エリカが珍しく驚いた表情をするも、

「弾種発煙弾！」

と、すぐに指示を出した。

「目標は砲塔正面、撃て！」

今度は発煙弾を砲塔に直撃させた。着弾直後、煙幕が辺り一面に広がる。

視界を奪われた英国淑女のチャーチルは砲撃を中断する。

その隙に、I V号戦車はチャーチルの背面に回り込む。チャーチルが発砲するも、発煙弾のお陰で外れた。

「シャルロット・ケリを！」

エリカの言葉に、シャルロットはチャーチルの後ろ側を狙う。

だが、それを察知した英国淑女は即座にチャーチルの向きを変えようとする。しかし、それを許すほど、北アフリカからのエリカ達は許さない。シャルロットが車体側面後部の駆動輪を撃ち抜いて履帯を壊した。英国淑女も諦めず砲塔を回すが、砲塔を旋回させるより早く、I V号戦車が砲身を向ける。

そして、ドンツ!! と、2発の砲弾が放たれた。

I つは、英国淑女が乗るチャーチルのエンジン部分に、もうI つはエリカ達が乗るI V号戦車の砲塔天蓋を跳弾した。

結果、チャーチルはエンジン部から出火し、I V号戦車から放たれた2発目の砲弾で

完全に動かなくなつた。

「脱出！総員脱出！」

チャーチルの砲塔正面で未だ白煙を上げる発煙弾とエンジンからの黒煙の中、英国淑女達が脱出するのがうつすら見える。

「……終わったの？」

エマはまだ状況を理解していないようだ。

「ええ、私たちの勝利よ。」

エリカは安堵のため息を漏らしながら答えた。

「や、やった……!!」

エマが歓喜の声を上げた。

「勝った!!!」

「やりましたね！」

シャルロットとマリアがハイタッチする。

「ああ、やったんだ……私たちは……」

ハンナもそう言い、皆喜びの声を上げている。

「……ハンナちゃん？」

エリカがふと、ハンナの方を見ると彼女は泣いていた。

「ごめんなさい、安心したら涙が出てきて……」

そう言つて手で目元を覆うハンナを見て、

エリカは優しく微笑む。

「良いのよ。あなたはよく頑張つてくれたわ。皆も、よくやったよ。お陰でこの5人は生きてる。」

そう言つて彼女や他の3人を慰めるエリカ。

「……エリカさんつてこんなに優しくかつたんですね。もっと怖い人かと思つていました。」

「失礼ね。私だつて人間よ。」

そう言つたエリカにシャルロットが

「ホントかあ?」

と言うと、エリカはムツとして

「何? 文句あるの?」

と言り返す。とそこでエマも加わつて、

「だって、北アフリカでセクハラしてきた上官のキ○タマ蹴つて病院送りにしてたじゃん?」

と言った。

「あれは正当防衛。でもあの悶絶顔はちよつとクセになったかも。」

エリカはそう言つて笑いだした。それにつられて他の4人も笑つた。

「さて、これからどうするかしらねえ。」

ひとしきり笑うと、エリカが口を開いた。

「ま、十字路確保じゃない?」

シャルロットが言う。確かに、司令部からの命令である十字路の確保は最優先事項だ。

「1両で? 私たちが送られるつてことは敵も十字路にいるはず。」

と言うのはエマ。確かに、と5人は未だ炎上したままの僚車だった残骸を見やる。撃破された3両のI V号戦車には生存者はいないようだった。

「なら、ここで待ち伏せしてたらどうですか?」

マリアが提案する。

「それはダメ。この辺りに草はあつても遮蔽物なんてないし、下手したらヤーボに爆撃されることになる。」

とエリカが反対すると、

「じゃあ、やっぱり行くしかないんじゃないですか? ここで散つた仲間の為にも。」

とハンナが言った。

「・・・そう、ね。」

エリカはそう呟くと、戦車のハッチから上半身を出して、双眼鏡を使って辺りを確認する。

そして、

「敵影無し。じゃ、さっさと十字路盗って、また味方にとっての天使様と洒落こもう。」

と、笑顔で言った。

「了解！」

5人の声が重なる。

彼女たちは、まだ知らない。

自分たちの前に圧倒的に数で優勢な英軍がいることを。

ファレーズ・ポケット、入口こじ開ける編

「・・・行きましたわね。」

一方、十字路へ去っていく、エリカ達のⅠⅤ号戦車を、チャーチル戦車の車体の下で窺う英国淑女は言った。

「はい、おそらく十字路へ向かうかと。」

と答える装填手。

「よろしいですね。通報はしておいたから、多数の友軍が待ち受けることでしょう。」

英国淑女は、あのⅠⅤ号戦車が多数の対戦車砲や戦車駆逐車に蜂の巣にされる姿を想像したが、現実はそうは上手くいかなかった。

「はい、報告ですと4両の内1両を撃破、その後、計3両撃破との報告が来ました。」

「えーと、つまり、全滅だな！ヨシ！」

そう、通報をした奴と受け取った奴との連絡に齟齬があったのだ。一応名誉の為に言っておくと、現在十字路は、ファレーズポケットを塞がんとする英軍の渋滞が起きて、

交通整理に忙しかったのである。

つまり、エリカ達のⅠⅤ号戦車はその渋滞中の十字路に突っ込んだ訳である。

「さあ、行くよ皆。」

エリカはそう言つて、キューポラから半身を乗り出して前方を見る。

「了解。」

4人が応える。

「エマ、とにかく動き回つて敵に狙いを絞らせないで。」

「わかつた。」

「シャルロツテ、敵が撃つてきたら反撃お願い。」

「任せて。」

「ハンナちゃんは・・・」

「わかつてます。私は機銃を撃ちつつ、別命まで待機します。」

エリカは一呼吸置くと、

「それでは、戦闘開始！」

と言つて、エンジンをかけた。

エンジンがかかり、前進を始めたⅠⅤ号戦車はボカージユを踏み倒し、英軍の車列の

横っ腹をつく形となった。

「敵戦車だ！」

「応戦しろ!!」

ボカーージュからの突然の奇襲に混乱した英軍戦車は、慌てて砲塔を向ける。しかし、
「遅いよ!!」

と叫びながら、シャルロットが撃鉄を落としました。砲弾は、見事にシャーマン ファイ
アフライの側面装甲を捉え、大爆発を起こした。

「よし、シャルロットは長砲身の奴を優先的に、エマは回避優先、ハンナは歩兵を蹴散ら
して。マリアは、頑張つて！」

「了解。」

「了解！」

「わかりました！」

「・・・え？」

4人は返事をして、それぞれ行動を開始する。

「目標、シャーマン長砲身！撃て！」

シャルロットが叫ぶと同時に発砲する。その砲弾は吸い込まれるように側面に命中
し、

「撃破確認。」

とハンナが言う。

「次、またシャーマン長砲身！照準合わせて！」

シャルロットの言葉に、ハンナが素早く反応し、照準器を覗く。

「今だ、撃て！」

放たれた徹甲弾は、見事ファイアフライの正面装甲を貫く。

「やった、撃破したぞ！」

「まだ、気を抜いちやだめですよ。」

喜ぶ4人にマリアが言う。確かにそうだ。敵はまだ残っている。

「次の目標は……」

エリカがそう言いかけると、歩兵の1人が梱包爆薬を持っているのが見えた。

「敵工兵！」

気付いたハンナがそう報告しつつ車体機銃を放つも、ちょうど弾切れを起こしてしまった。

「正面に敵兵！弾切れですッ！」

「後進!!」

エリカはそう言って、ハッチから身を乗り出して拳銃を抜いた。

敵工兵が梱包爆薬を投げる体勢に入る。

エリカと工兵の目が合う。

しかし一瞬工兵の方が早く、撃たれると同時に梱包爆薬が投擲された。

「きやつ!？」

幸いにも手前に落ちた梱包爆薬は数多の破片を周りに吐き出し、I V号戦車の正面を叩いた。貫通したものは無いが、I V号戦車の中は衝撃と爆音に包まれた。

「エマー!？」

「い、生きてるよお!」

「ハンナー!？」

「だ、大丈夫です!」

「シャルロツター!？」

「大丈夫!」

「マリアー!？」

「問題ありません!」

全員の無事が確認できると、I V号戦車は再び前進を始めた。機銃弾や徹甲弾、榴弾を四方八方に撃ち放ち十字路を確保した。

I V号戦車の他には、そこかしこに6ポンド砲やユニバーサルキャリア、ダイヤモンド

偵察車の残骸が残り、2両のファイアフライも撃破していた。

「どうしようか、これ。」

と、I V号戦車を降りたエリカが呟く。

「とりあえず、放置しておけば良いんじゃないでしょうか？ いずれ土に還りますよ。」

と、ハンナが言った。

「そっか。じゃあ放置で。」

エリカがそう言うと、全員が同意した。

そして、十字路の先へとファレーズポケットを閉じに向かった英軍は、退路を遮断されかけていることに気付いた。

「!? 全車反転！ 部隊集結後、来た道に戻って十字路を奪回する！ 敵は後ろだ！」

指揮官の指示で、ファレーズ・ポケットを塞がんと前進していた英軍の先遣隊は逆に包囲される恐れありと判断し、十字路の奪回へ動き始めた。

一方エリカ達はどうと、十字路の確保に成功した後、ありつただけの偽装を自車に施した後、すぐそばの無事だった家屋を訪れていた。住民は既に避難したようだった。

「さて、これからどうするかだけど．．．」

と、エリカが言う。

「友軍が来れるかはともかく、まずは生きてここを確保するべきだよ。」

とエマが言う。

「その通りだと思います。友軍の為にもあのチャールズ戦車を撃破したんですもんね。」

とハンナも続ける。

「ううん、でもこのままだと、私たちがここにいる事がばれてしまうかも知れませんよ？」

と、マリアが不安げな顔で言う。

「それは・・・」

「まあ、その時はその時だよ。」

ハンナの言葉を遮って、シャルロットがそう言った。

「うん、私もそう思う。」

エマも続けて言う。

「違う、戦車はなんだったってできる！それに北アフリカ戦の生き残りが3人もいるんだ！」

と、エリカが言う。

「・・・分かりました。みんながそれでいいなら、私はもう何も言いません。」

マリアが苦笑いを浮かべながら言う。

「よし！そうと決まれば善は急げ！行動開始だ！」

「善・・・？」

こうして、彼女たちの戦いは続く。

「でもやっぱその前に休憩！」

続く・・・のか？

ファレーズ・ポケット、入り口閉じさせない編

「十字路に近い。各車、警戒を厳とせよ。ファイアフライはいつでも撃てるようにしとけ！」

英軍戦車長はそう僚車に警戒を促すと、十字路へと近づく。

「十字路に多数の残骸を視認。」

「・・・何?！」

突然の報告に驚く。十字路には煙が上がっており、そこに何かがいることは確実にあつた。

「敵か?！」

「おそらく・・・いや、待て。あれは友軍車両の残骸だ。・・・手酷くやられたな。」

「隊長、タイガーの作業なんじや・・・。」

「ばか、こんなところにあいつらが来るわけ無いだろう。きつと別の奴等だ。」

「しかし、この辺りで交戦しているのは我々だけですよ。」

「・・・確かにそうだが、今はそれどころじゃない。早く十字路を確保せねば。」

そう言って、彼らは十字路に近づいていった。

「うあああ、こつち見てるう・・・!!」

シャルロットに照準器を借りて外を見ていたマリアが小声で言った。

「だから、ここに潜ませる必要があつたんですね。」

エリカが人差し指をピンと立てて言った。

今、エリカ達のⅠⅤ号戦車は藁の山に潜っていた。藁を被せて近くの藁の山に擬態している。英軍の車列は十字路に差し掛かっている。

「・・・そろそろかな。」

と、自身も頭に藁をつけてキューポラの上から外を見ているエリカが言うと、

「そうですね。」

と、ハンナが答える。

そして、車列の先頭の戦車との距離が50m程になった時、その戦車の車長とエリカの目が合った。

「・・・ッ!?!」

一瞬にして顔面蒼白になった英軍戦車長に対し、エリカは口角を吊り上げて

「シャルロットア！」

と叫ぶ。

「待ってました!!」

とシャルロットが砲弾を放った。距離は50m以内。必中の距離だった。英軍戦車長が気付いた時には、既にその体は砲塔ごと吹き飛んでいた。

「ハハハハハ！ヒーハア!!」

「エマ!」

「任せといて!」

シャルロットの笑い声中、エマは即座にI V号戦車を前進させ、藁の山から這い出る。

「戦車前進! 敵戦車を撃破するぞ!」

「了解!」

エリカの合図で、I V号戦車が飛び出した。

「なっ!?! 敵戦車! 応戦しろ!!」

「どこだ!?!」

「お前が邪魔で撃てない! 射線からどけ!」

初撃で隊長車を撃破された英軍は混乱に陥った。

「さあ! 狩りの時間だ! かかってこい!」

と、シャルロットが言うと同時に、徹甲弾が放たれ、その先にいる2両目の戦車に命

中した。

「やられた！脱出！」

「大変だ！エミリー！敵はタイガーだ！」

「違う！あれはI V号戦車だぞ！」

2両目はエンジンから火を吹き上げ、乗員が大急ぎで飛び出した。

「ああ！エミリーがやられた!!」

「落ち着きなさいメアリー、あなたが指揮を引き継ぎなさい！」

「り、了解です！」

と、答えた3号車は残骸の影に隠れ、英軍の戦車隊も指揮統制が復活した。

「目標、2時方向のチャーマン！」

「てえ！」

エリカ達のI V号戦車はまたM 4を撃破すると、機銃で歩兵隊を蹴散らし、縦横無尽に走り回った。

「もつと戦果を！もつと戦果を!!ハハハハハ!!」

と、シャルロットが興奮した様子で言う。

「ああ！戦車はなんだってできる！」

と、エリカもそれに呼応する。でもどこか、またかよ。と言いたげな表情だった。

「・・・シャルロットさん、いつもああなんですか？」

ハンナがエマに聞くと、

「仲間内じゃ無いとあぁはならないから、認めてくれたんじゃない？」

と返ってきた。その後も、エリカ達のⅠⅤ号戦車は、残骸を上手く盾に立ち回り、次々と敵戦車を火だるまにした。

「・・・ん？」

と、そこでふと何かが見えた気がして、エリカは目を細める。すると、

「・・・あれは！」

そこには、Ⅰ両の戦車がこちらに向かってきていた。

「シャーマン長砲身！砲塔回せ！」

「・・・あれ？」

シャルロットはとっさに照準を合わせる。だが、マリアが徹甲弾を掴もうとした手は空振りした。徹甲弾はもう残っていないかった。

「あ・・・」

ファイアフライが放った砲弾は咄嗟に車体を回して回避行動をとったエマの奮闘虚しく、砲身を撃ち抜き、勢いそのまま砲塔正面の左側3分の1を吹き飛ばした。

「うわあああ!!？」

「だ、大丈夫!？」

エマが振り返ると、腹部を朱色に染めたシャルロットが呻いていた。

「シャルロットー！マリアー！救急キットを出せ！」

エリカも血にまみれた左腕を抑えながら叫ぶ。

「わ、わかりましたッ！」

マリアは急いで救急箱を取り出す。

「いでで・・・」

「シャルロット曹長、動かないで。」

マリアは布を当てて止血処置を行い、エリカは自らの傷口に布をキツく巻いた。

「これでよし・・・」

「エマ！ここから早くずらかるよ。」

「了解！」

すぐに後進をかけるエマだが、ファイアフライはまだ狙ってきていて、残骸の影から動けなくなってしまった。

「クソッ！あの野郎まだやる気か！」

と、その時、砲弾が幾つか飛来し、地面を抉った。

「Shit! 敵の増援だ! 退却しろ!!」

英軍を退却に追い込んだのは明後日到達予定のはずのSS装甲師団の装甲偵察大隊所属のsd. kf z 234 / 2プーマ装甲車とハーフトラックに分乗した歩兵達だった。

英軍にとつては撃滅できない相手でもなかったが、包囲される危険を1層感じた為か、残った部隊も煙幕を張り逃走に移った。

「逃すな! 掃討しろ!」

SSの小隊長がそう言うと、歩兵部隊は周辺を掃討し始めた。

「・・・やれやれ、危なかった。」

と、IV号戦車のキューポラから顔を出したのはエリカだった。

「救援、感謝します。案外近くにいたんですね・・・。」

近付いてきた大隊の指揮官車両にエリカが敬礼する。被弾した際の破片やらでボロボロだ。

「はは、砲声が聞こえたんでね、飛ばしてきたのさ。」

と大隊長は笑つてみせた。

「しかし、随分派手にやりましたな。」

「ええ、まあ。」

「おかげでこつちも本隊を置いてきちまつた。ははは。」

と、大隊長は笑つたが、負傷しているエリカ達を見るや、その笑いはすぐに止まつた。つて、衛生兵！早く負傷者を後送しろ！」

すると白地に赤十字の衛生兵が数人で担架を持ってかけてきた。ハンナとマリアが、出血で顔面蒼白、瞳孔が開きかかっているシャルロットを半壊した砲塔から運び出した。

「うう、ありがとう・・・。」

弱々しく吐き出された言葉に、

「お救い料、後で貰いますからね。」

とマリアは笑つてみせた。彼女も、エリカやシャルロット程では無いが、怪我をしている。

「ハンナ。」

シャルロットが呟くようにハンナを呼ぶ。しかしハンナは彼女の目の前にいる。ハンナが返事をする、

「あ、ああ。ごめん。もうほとんど見えなくて。．．今までたくさん殺してきたバチかな．．．?」

「縁起でもない事言わないでくださいよ!」

とハンナは少し怒ったような口調で言った。

「ああ、エリカ、エマ。共に戦えて良かったよ．．．。」

シャルロットは力なく微笑むと、そのまま気を失った。

「シャルロットさん!」

「ああ、大丈夫、気絶しただけ。」

と、衛生兵が落ち着かせるように答えた。

「よかった．．．。」

「ただ、安心はできないけど。」

と、エマは顔を曇らせる。

「．．．曹長、私は?」

マリアはボソリと呟いた。

「少尉殿も。」

衛生兵にそう促されて、エリカも運ばれていった。

「．．．どうします?」

運ばれていくシャルロットとエリカを見ながら、ハンナが切り出す。

「さあね。砲手も車長もいないんじゃない？」

とエマが答える。

「じゃあ……。」

「……いいんじゃない？このままで。」

とマリアは言う。

「いいんですか!？」

「だって、私達がいても足引つ張るだけだし……。」

「でも、それならそれで、って、それ大丈夫なんですか？」

ハンナはマリアの怪我のことを指摘する。

「んー、まあ、平気だよ。ありがと。」

と意味つつ、彼女は左手を押さえている。

「うわ、血が。」

「ちよつと痛いかも。」

「そりやそうですよ！早く手当しないと！」

「うん。わかっているんだけど、ちよつと疲れちゃったかな……。」

と、マリアはため息をつく。確かに疲れ切った様子だ。そのまま力無く倒れた。

「うわあああああ!!!」

「・・・大丈夫、寝てるだけみたい。」

エマはマリアの状態を確認すると、

「じゃ、とりあえず戦車に載つけるから手伝って。」

と言い、ハンナとエマは、寝息を立てるマリアを引き摺って、砲塔が半壊しているⅠ
V号戦車へ戻っていった。

死の森 前編

ファレーズでの戦闘から数ヶ月経った。

「なんでわざわざこんな森まで……？」

と、不満げな声でそう言うのは、左腕に破片を受けたエリカの代わりに車長となったエマだ。

「そりや、本国侵入を防ぐ為では？」

今や操縦手に配置が変わったマリアが答える。

「なんか薄気味悪いですね……。」

無線に関しては今のⅠⅤ号戦車内では一番だったことから、3人の中で唯一役割が変わらなかつたハンナが呟く。

彼女らがいるのはヒュルトゲンの森。ドイツ本国への侵攻を図る連合軍に対抗するべく、増派されてきていた。

「まあね。」

と、エマは同意する。

「頼むよ新兵ちゃん達。」

と、運転席のマリアは言う。新たな砲手と装填手は新兵で補われている。

「は、はい！」

と、新兵達は返事をした。が、緊張は解けないようだ。

「味方部隊が反撃を行う。第3小隊は援護しろ。」

無線から聞こえてきた命令に、ハンナは慣れた手つきで応答する。

「了解です。」

新兵達は、戦闘の予感に、尚更顔を引き攣らせるのだった。

「敵歩兵多数！」

とハンナが叫ぶ。木々の間を縫うように這う道を進んでいたが、突然、茂みの向こう側から、銃撃音が鳴り響いたのだ。

「前進！歩兵隊の盾になる。」

エマに言われるとマリアがアクセルを強くいれる。履帯が朽木を踏み潰して乗り越える音が聞こえる。

「こちら2号車！敵の攻撃を受けている！」

と、エマからの無線が響く。その間銃弾は車体を叩く。どうやら敵の火力は思ったよ

り強いらしい。

「大丈夫なんですか!？」

と装填手が狼狽えるが、

「相手は小火器だ。あんな豆鉄砲じゃ撃ち抜けないさ。」

とマリアが返した。実際、数発当たろうとも、まだ装甲を貫通していない。

「そうだといいいんですけど……。」

「心配性だねえ君は。ほら前見なさい。もうすぐ接敵だよ。」

前方を見ると、数名の兵士が見えた。

「砲塔1時方向の機関銃巢、距離100。榴弾装填。」

エマがそう指示すると、装填手が動き、いつでも撃てるようになった。

「撃てー!」

エマがそう言うが、砲弾は放たれない。よく見れば、砲手はガクガク震えながら固まっている。

「どうした!？」

とマリアが尋ねると、

「い、怖い……怖いんです。」

と砲手は答えた。その瞬間、敵の兵士の1人が、少し大きな筒をこちらに向けてきた。

「敵対戦車猟兵！撃て！！」

エマが焦りを見せるが、砲手はまだ震えたままだ。

「ハンナ！」

「私が撃ちます！」

マリアの叫びとハンナの応答から1秒と経たずに車体機銃が掃射され、敵の対戦車猟兵は地面に倒れ伏した。

「目標、沈黙。」

ホッとしたようにハンナが報告すると、砲手に向かつて

「仕事しろ！」

とマリアが怒鳴る。砲手は慌てて

「ご、ごめんなさい。ひ、人を撃つのが、こ、怖くて……。」

と言った。エマは黙り込んだ。

森の中の連合軍を蹴散らしながら進み、目標地点を確保した一行は一時野営することとなった。

「……………」

無言で夕飯を食べていたハンナに、

「あのさ、私、話したいことあるんだけどいいかな？」
とエマが言った。

「良いですよ。私で良ければ。」
とハンナも返した。

「ありがとう。．．．新しい砲手の子。今日の反応が普通なんだろうね。」

「．．．と言うと？」

そう首を傾げたハンナの元に、マリアもやってきた。

「なんの話ですか？」

「分かったよ。マリアにも話す。」

そう言ったエマは、まず自分の話をすることにした。

「私の親は労働者で、呑んだくれだったんだよね。家にはいないしいたら酒臭いし暴走するし。」

そう語り始めたエマに、2人は静かに耳を傾けた。

「そんな私の面倒を見てくれたのはエリカの家族でさ。優しい人達だったんだよ。でも、ある時から周りの友人達が軍に入隊したんだ。もちろんエリカも。」

そう言ってエマは俯きながら話を続ける。

「しばらくしたら、戦争が始まって、エリカと共に入隊した友人達が負傷したり、紙に

なって帰ってくるようになったの。とても心配になった。エリカが、死んでいるかもと考えるよね。」

「えっと、そのエリカさんはあのエリカ少尉のことですか？」

ハンナがきくと、

「・・・他にいるかしら？まあ、そうだけど。」

と、エマは答える。

「それでね、ある日決心したの。私もエリカと同じところに立つんだって。」

「同じ場所に行くために、戦車兵に志願したんですか？」

「うん。幸いなことに成績は良かったからね。ただ、エリカが士官だったのは想定外だったけど。」

ハンナと問いにそう返したエマは、『AFRIKA』と書かれた袖章を見せた。

「北アフリカでの従軍の証ですね。」

マリアが言うくとエマはうなづいた。

「エリカと初めて会えた。その時シャルロットも一緒になったな。」

そう懐かしむエマに、ハンナは何の話がしたいのかわからなくなってきた。

「それでね、初陣が終わった後、皆震えてた。私やシャルロット、エリカだって例外じゃなく。『殺した』というのが怖かった。」

エマは一呼吸おいて続けた。

「だから、今日あの砲手の子が躊躇ったのも、仕方ないことなのかもね。」
その言葉にハンナは何も返すことができなかった。

死の森 後編

翌日、一行は川にかかる橋を奪還する歩兵隊を援護することになった。

「斥候によれば、橋に戦車はいない。歩兵隊がいるが、対戦車猟兵に気をつけろ。」

エマが無線でそう伝えると、

「了解！」

と応答があった。

「気をつけて。火あぶりにされなくなかったら周りを見回して。」

ハンナが緊張している新兵達に言う。

「はい！」

彼女らは元気よく返事をした。

「敵火点！撃ってきた！」

機関銃の曳光弾が空を裂いて飛び回る。

「弾種榴弾。距離100の機関銃陣地」

。

エマの指示で装填手が榴弾を砲尾に押し込む。

「距離100の機関銃陣地！撃たなきや殺されるぞ！」

砲手が復唱し、照準を合わせる。

「てえ！」

「ツ!!」

轟音とともに放たれた砲弾は弧を描きながら飛んでいき、目標地点に着弾した。

「目標沈黙！」

その声を聞いて、ハンナはホツとした。しかし、安心するのはまだ早い。まだ戦闘は終わっていないのだ。

「進め！」

そうエマが命じると、履帯音が鳴り響く。

「こちら3号車。前方より敵の増援を確認！」

無線機から声が届く。

「こちら2号車。歩兵が煙幕弾を要請してます。」

「わかった。その代わり支援射撃は難しいと伝えておいて。」

「了解！発射！」

各車から煙幕弾が発射され、視界が悪くなる。

「前進！敵との距離を詰めるぞ！」

エマが叫ぶと同時に、先鋒をかって出てバリケードの隙間の道を走っていった数人の歩兵が爆発の中に消えた。

「ほ、砲撃!？」

マリアが言うときエマが、

「いや、これは地雷だ。」

と答えた。

「地雷原ですかね?」

ハンナが尋ねると、

「恐らく。」

とマリアが答えた。

「地雷踏まないよう注意しろよ!」

そう叫んだ直後、また数人の歩兵が吹き飛んだ。

「地雷だ!こちら3号車、履帯破損!行動不能ですッ!!」

「随伴歩兵が少なくなってきました!」

次々に損害報告が入る。

「ちくしょう!!どうするんだこれ!？」

マリアが毒づくとき、装填手が

と言った。

「了解ですッ！」

そういうと3号車の乗員は銃撃戦の最中を突っ切り、エマ達のI V号戦車の上に飛び乗った。直後、別の対戦車ロケットが命中し、3号車は吹き飛んだ。

「これで全員！撤退！撤退!!」

「走れ！走れ！」

マリアがそう叫びながら、めいっばい後進してエマ達は戦場を離脱した。

「歩兵の奴ら、どこまで逃げたんですかね？」

後退したは良いものの、歩兵とはぐれてしまった、エマ達のI V号戦車隊が森を進んでいた。マリアの問いに、

「まだヴァルハラに行つてなきや良いけどね。」

とエマが返す。

「・・・すいません、少し外の空気吸って良いですか。」

砲手がそう言った。気分が悪そうな顔だ。

「良いよ。でも気をつけてね。」

「はい！先輩方もお元気で！！」

そう言って、新入りはにこやかに去っていった。

「なあ、砲手って皆あんなになるのかな？」

新入りが去った後、エリカが言う。

「知りませんよ。」

マリアが返すが、

「ま、人の死を見ても平然とできる私たちもたいがいでしょ。」

とエマが言う。

「・・・私たち、おかしくなっちゃったんですかね。」

ハンナが不安げに尋ねる。

「どうだろうね。でも、私たちは今生きてる。それで十分だよ。」

とエリカが答えた後、全員押し黙った。

乾坤一擲の大作戦編

「雪だーッ!!」

そう叫んだエリカは動物のように雪の中へ飛び出していった。

「・・・少尉・・・?」

マリアが、なんだあれは?と言った顔で呟く。ハンナもいきなりの出来事に呆然としている。

「エリカ、雪が好きなの。」

エマが恥ずかしげに言った。現在、エリカ達の部隊は鉄道に載せられ、次の任務地へ配送されている。が、日中は敵機の危険が付きまとうため、トンネルの中等で待機している。ハンナとマリアは、それが暇だったんだらうな、と考えていた。エリカは雪だるまを既に1つ作りあげていた。

「・・・なんじゃありゃ。」

そう言いながらやってきたのはシャルロットだ。ファレーズでの戦闘で17ポンド砲の破片で負傷して、後送されていた。

「あ、曹長殿。」

ハンナの質問に、エリカは即答した。

「進むよ。」

「ですよね……。」

こうして、また降下猟兵をデサントさせ、エリカたちのI V号戦車は進んだ。

このころ、進撃するドイツ軍の中央部を担当する第5装甲軍等は、北の第12SS装甲師団などの武装SS部隊よりも快進撃を見せていた。

しかし、それらのみならず、攻勢自体にも暗雲が立ち込めてきていた……。

クリスマスプレゼントは爆弾ですか？編

「突っ込め!!」

「進め進め!!」

歩兵の迫撃砲が打ち上げられ、機銃による制圧射撃の中、エリカたちのI V号戦車隊は橋を守る最後の抵抗拠点を攻略せんと、歩兵と前進を始めた。

ここで橋を落とされれば、これ以上進攻できなくなる。それはつまり、ドイツ軍の攻勢計画が崩壊することを意味した。

そして、それを阻止しようと、ドイツ軍は猛攻をしかけた。

「戦車だ！戦車が来たぞ!!」

「工兵隊が橋を破壊するまで持ちこたえろ!!」

米軍は砲撃の中、持ち場を死守すべく塹壕へ滑り込む。そこへ戦車砲の一斉射が浴びせられる。

「ちくしょう!!」

「早く！長く保たない!!」

「待っててください!!」

無線で急かされ、焦る工兵だが、
なかなか爆薬の設置は進まない。

「何やってんだ!？」

「まだです!あと5分!」

「こんなことならもつと爆薬積んどきやよかった!」

米軍は焦っていたが、それは攻撃側のエリカたちも同じだった。

「進め!橋を確保しろ!」

前進する歩兵の盾となるように、4両のI V号戦車が進む。

「敵火点、距離200!榴弾装填!」

「了解!」

「撃てッ!!」

榴弾が放たれ、機銃を乱射していた敵陣地を吹き飛ばす。

「よし!次!」

「あい!」

「次も敵火点、距離200!続けて榴弾!」

「装填完了!」

「照準良し！」

「撃て!!」

数秒おきに榴弾が飛び、陣地が少なくなる。逃げ惑う敵兵には歩兵の小火器や戦車の機銃の弾幕が襲いかかる。

「次！右斜め前方の陣地！」

「了解！榴弾装填！」

「装填完了！いつでもいけます。」

「撃て!!」

「装填完了！撃てますツ!!」

「撃てツ!!」

そんなことを数回繰り返していると、ようやく陣地帯を突破した。が、ここで思わぬ事態に遭遇する。

「こちら3号車、ガス欠です！」

燃料の枯渇である。ここ最近補給が滞り気味であり、燃料などは特に不足していた。今までは少ない燃料を分配し直したりしていたが、今回はそうはいかなかった。

「おい、どうした？」

歩兵の1人が登って来ると3号車を指さして言った。

「急げ！橋が落とされるぞ!!」

燃料補給を済ませたエリカたちは2号車に追いついた。が、思ったより抵抗が激しく、歩兵が必死に応戦している。

「歩兵が釘付けにされてる!」

「構わん！押し通る!!」

そう車内で言った2号車は、歩兵の前進を待たず、橋に向かって突っ込んでいった。それに遅れて、歩兵たちが橋に差し掛かった。

「戦車が来た!」

「まずい！早く!!」

「おし！準備よし!!」

「起爆!!」

工兵の1人がスイッチを入れる。電気式の爆薬はタイムラグ無く爆発した。

「うわあああ!!」

橋に突入した歩兵は、爆薬の爆発か、それで起きた橋の崩落に巻き込まれ、2号車も崩壊する橋から、極寒の川へ滑り落ちた。

エリカは僚車にそう指示すると、

「対戦車猟兵に気をつけて！」

と言う。

「了解です！」

ハンナは機銃で牽制しつつ警戒を続け、シャルロッテは機銃の発砲炎目掛けて榴弾を直射する。

「前方に味方！左に躲して！」

「わかった!!」

エリカの指示でエマが左折し、伏せていた味方歩兵を躲す。

「装填良し！」

マリアはひたすら砲弾を装填し続ける。

「もうすぐで突破できるぞ！」

エリカがそう言った直後、上空から風切り音が響き渡る。

「ヤーボです！」

ハンナが

叫ぶと、全員が空を見上げた。そこにあつたものは、まさしく死神たる、銀翼を連ねた敵機の姿だった。

「まずい!とんだクリスマスプレゼントだ!」

シャルロットが叫び、エマが車体を急旋回させると、緩降下していた敵機が投弾した。至近に着弾したそれは、凄まじい爆風を起こし、車体を大きく揺らした。

「うわあああ!!」

「きやああ!!」

車内では悲鳴が上がる。

「大丈夫!」

「なんとか……」

「ええ。」

それを聞いたエリカは間髪入れずに僚車に問いかける。

「損害報告。3号車は?」

「い、生きてます。」

「4号車は?」

「……」

「おい、4号車?」

「……」

「……殺られたか。」

機甲師団による追撃による攻撃と慢性的な補給不足で、エリカたちの師団は戦車82両、車両その他を失い、残存部隊も戦闘どころでは無くなっていた。

しかし、不運にも撤退中にはぐれたエリカたちは、幸運にも追撃に合わず、2両に減った小隊はバストーニュ近辺で合流した友軍部隊に組み込まれ、バストーニュ攻略に駆り出された。バルジの戦いの最後の戦いが、今始まった。

練度つて大切やな編

「これより私たちは、バスターニユから北上し、敵の側面について包囲するわ。これで終わらせるわよ。」

未だ包囲戦時の傷跡が残るバスターニユで、M4A1を駆るウェーブのかかった金髪の米軍士官が言う。

「ああ。やり返してやろう。」

M4A3E8に乗るベリーシヨートの戦車兵が言う。

「ペイバックタイムよ！」

そう言つて興奮するM4A1(76)Wの車長を落ち着かせつつ、その他の各員も準備を終え、エンジンをふかす。

「出発！」

その頃、ドイツ軍は追い詰められていた。西部戦線全域に渡つて攻勢を仕掛けたドイツ軍は、補給の停滞とかけつける連合軍の増援の到着により押し戻されつつあり、バスターニユから北上する米第3軍と、更に北から南下してくる英第21軍集団により退路

「了解！」

そう返事が来ると、エリカたちのI V号戦車は砲塔を旋回させる。

「照準良し！」

「装填良し！」

シャルロットとマリアがそう報告する。

「撃て！」

エリカの号令で放たれた砲弾は、M 4の砲身を叩き割った。そしてそれを逃さず、僚車が仕留めた。

「まだここらにいるかもしれない。」

エマがそう言うと、風切り音が聞こえ、光の矢にも似た砲弾が3号車を貫き、弾薬を誘爆させた。

「10時にM 4長砲身です！」

ハンナの報告に続いて飛来した2発の砲弾を見て、エマは手近な藪の影にI V号戦車を滑り込ませた。

「これはまずいなあ。」

エリカが、撃破された3号車をチラリと見て言った。

「この近辺の友軍戦車は先程壊滅。敵は少なくとも3両。そしてこっちを捕捉してる。」

「了解」

そう言い残して、隊長は茂みの中に隠れたM4の隊列から静かに自車を出した。本来、数の利で殴るのは彼女の美学にはそぐわないが、彼女が今までの戦闘で喪った戦友の顔を思い浮かべると、そんなことに拘ってはられない。

「……これはスポーツじゃない、戦争よ。」

彼女はそう言いきかせつつ乗車を前進させた。

「……来たわね。エマ、出るよ。シャルロット、射撃用意。」

こちらに近づいてくる気配を感じ取り、エリカはエマとシャルロットに指示を出して車体を潜ませていた藪から出す。

「距離300。撃て！」

「喰らえ！」

シャルロットが放った砲弾は、見事にM4の砲塔を直撃した。しかし角度が悪かったのか、相手の防楯と砲身を破壊しただけに終わった。

「あ、徹甲弾が切れました！」

マリアがそう報告すると、エリカが

「残りは!？」

「……アイツらっ!!……やるじゃないか。」

照準器やペリスコープの中の視界は、煙幕で覆い隠されていた。放たれた砲弾は発煙弾だったのだ。

「ファレーズを思い出すよ、あのチャーチル戦車との戦い。」

シヤルロットが照準器を覗きながら言う。上手く行ったからか、その口角は心做しか上がって見える。

「でもあの後みたいに撃たれるんじゃないよ。」

「分かっていますよ。」

エリカの言葉にエマがそう答えながら、ジグザグにI V号戦車を動かす。一応3両のM4は事実上無力化できた訳だが、最後のM4の砲自体はまだ生きているため、油断は出来ない。

「この煙が晴れたら、また撃ってくるかもしれないですね。」

ハンナが無線機で友軍の無線を探りつつ言う。

「そうだね。早く逃げないと、発煙弾も在庫切れです。」

マリアが不安そうに報告する。

そう言った矢先、煙幕の向こうから砲弾が飛来し、至近で爆発する。
「うおっ!? 中々近い!」

エリカが少し頭を引つ込めつつ言うのと、シャルロットが
「凄い凄い! 中々骨のある相手だよ!」

と興奮気味に返す。

「・・・相手は本気だね。こっちも本気で行こう。」

エリカは真剣な表情で呟くと、マリアが

「あの、砲弾もう無いですけど。」

と言った。

「・・・ああ、うん。知ってる。」

エリカはそう言うのと、

「ちゃんと策はあるよ。とっておきの。」

と続けた。

ゴクリ・・・

とエマ以外の3人が唾を呑む。少しの間もったいつけてエリカは、

「逃げるんだよー!! 全速前進!!」

と叫んだ。

「ええ．．．」

「やっぱりそうだと思った。とつくに全速だよ。」

と、エマが呆れたように言う。

「発煙弾ももう無いですし、煙幕もきれますよ。」

とマリアが言うが、エリカはキューポラから後ろを見張りながら

「大丈夫、エマとこの子を信じよう。」

とⅠⅤ号戦車をトントンと叩く。

直後、エマがⅠⅤ号戦車を急に右へ方向転換させる。途端に砲弾が左を掠めていく。

「ひゃあっ!?」

「危なかった．．．!」

「よく分かったねえ。」

「．．．何でそんなこと分かるんですか?」

ハンナの問いに、

「勘。」

と、あつさりエマは答える。

「ええ．．．」

「ま、本当は前見たM4の残骸を調べて、どれくらいで装填、照準ができるかとか考えて

みたりしたの。」

「ええ・・・」

「あ、そろそろ煙幕切れる。」

シャルロットがそう言うと同時に煙幕が晴れ、M4A3E8の砲門がこちらに向けられているのが見えた。

「来るッ!!」

エリカが叫ぶ。

「それっ!!」

とエマが阿吽の呼吸で回避させる。直後、砲弾が砲塔のシウルツェンの一部を弾き飛ばした。

「今のは危なかった!!」

マリアが冷や汗を流しながら言う。

「このままじゃヤバイから、煙幕使おう。」

エリカが言った煙幕とは、砲弾の発煙弾では無く、車体後方にある煙幕弾投射機のことだ。後ろに転がす形式な為、このように撤退する時にはこの上なく便利なのだ。

コロコロと煙幕弾が後方に転がり、煙幕を発生させる。

これで少しの間は時間を稼げるだろう。

「さて、あちらさんはどうするかね・・・」

エリカは煙幕の中を見つめながら言った。

「煙幕です。が、砲弾は残っていないでしょう。追撃しますか?」

M4A3E8の砲手は念の為指示を仰いだ。そして彼女の予想通り、指揮官は

「・・・やめておくわ。」

と答えた。

「良いんですか? 敵は徹甲弾を撃ち尽くしています。仕留めるなら今ですが・・・」

M4A1(76)Wの車長が問うが、指揮官の判断は変わらない。

「わざわざ仕留めに追いかける必要は無いわ。」

「・・・了解。」

彼女は納得した様子ではなかったが、とりあえずは引き下がったようだ。

「・・・それにしても、あのマーク4、中々の手練だった。まだあんな奴らが残ってるんだな。」

M4A3E8の砲手はそう呟き、照準器から目を離して、後ろの戦友の胸にもたれかけた。

こうして、後に『バルジの戦い』と呼ばれることになるドイツ軍の最後で最大の反攻作戦は失敗と終わった。

またしても小隊壊滅と同時に、それに伴い友軍からはぐれたエリカ達は、ヤーボの空襲と燃料不足と格闘しながら、ひたすらドイツを目指した。

幸いだったのは、彼女らが友軍と出会ったのはそれから数日後の範囲ですんだことだった。

転戦辞令は突然に編

「おーっ!!生きてたか!？」

そう中隊長に言われ、エリカ達は大きく安堵のため息をつく。

「はい、なんとか。．．．．．。そういえば他の戦車は？」

エリカが疲れを隠しきれないまま尋ねると、中隊長は

「ヤーボと燃料不足で全滅だ。お前らは運が良いなあ！」

と、どこかやけっぱちに笑った。その言葉を聞いて、エリカ達は顔を見合わせる。

「まあ、なんだ。無事で良かったよ。この後は再編を待つ予定。なんせ戦車が1両しか残っていないからね。休むと良いよ。」

そう言う中隊長は伝令に呼ばれて小走りです去っていった。

「ようやく休める！おやすみー。」

ずつと運転しっぱなしだったエマは早速操縦席でそのまま寝始めた。

「わ、私も。おやすみなさ．．．。」

燃料や整備関連でエマと同じ位馬車馬の如く働いていたマリアもそう言って、装填手席で眠り始める。

「・・・眠っちゃいましたね。」

ハンナがそう言うのとエリカは軍帽を脱いで背伸びする。

「ま、しようがないよ。・・・シャルロットは？」

「とりあえずは寝・・・」

シャルロットも欠伸をしたその時、

「皆、手紙が届いたぞー。まずはえーつと、シャルロット・シュミット曹長ー。」

という、手紙を配る声が聞こえてきた。

「!!!」

途端、シャルロットは半ば転げ落ちるような格好でⅠⅤ号戦車を降りると、手紙を受け取りに走っていった。

「また家族からか。筆まめな親だなー。」

とエリカが呟くと、ハンナは苦笑いしつつ

「ま、まあ良いじゃないですか。」

と言った。

「まあね。」

と、エリカが言った。その視線の先で手紙を開封したシャルロットは満面の笑みを浮かべている。

「・・・シャルロットさん、嬉しそうですね。」

「シャルロットは親の背中見て軍人になったらしいしね。多分、嬉しいんじゃないかな。」

と、エリカが言うと、1人の兵士がやって来て、

「少尉殿、中隊長殿がお呼びです。」

と、言った。

「あ、うん。すぐ行くよ。」

エリカはそう返すと、2人に手を振って、その場を離れた。

「・・・さて、これからどうなるのかな。」

エリカは小さく呟いた。

しかしその後、エリカたちにはまだわずかなる安寧すら訪れないのであった。

「・・・は、配置転換ですか？」

呼び出されて出頭したエリカは、中隊長から言われた言葉を復唱する。

「ああ、そうだ。実はな、この前ソ連軍の攻勢があつて、中央軍集団が壊滅してなあ。戦力再編の為にこの中隊からも稼働車両を出すように言われてね。」

「・・・つまり、唯一残つてゐる私たちが抽出される・・・と?」

「そうそう。でも、中尉に昇進だよ。」

中隊長は腕を組みながら言った。

「……。」

つかの間の休息すら無いことのために息が出そうになるエリカだったが、それをこらえつつ敬礼をする。

「了解しました。では、いつ出発でしょうか？」

「ん？ああ、今日の深夜にだよ。」

「……へ？」

エリカは思わず目を丸くした。

「そ。だから整備と鉄道に載せる準備と、旅支度は済ませておいてね。」

「わ、分かりました。失礼します。」

そう言うのと、エリカは再び敬礼をして、踵を返した。

(……ちきしょうめ。)

そう思いながら、エリカは寝ていたエマとマリアを叩き起して、5人で何とか整備と身支度と戦車の積み込み用意を済ませることとなった。そして、その日の深夜、エリカ達は疲労困憊で倒れかけながらも、I V号戦車と共に列車に乗った。

「うー、もう無理……。」

そう言いながら、I V号戦車の積載で神経を更にすり減らしたエマは操縦手席でグツ

タリとしている。

「私も限界です……。」

そう言い残してマリアも装填手席で眠り始める。力仕事を更にやった為当然であつた。

「……。」

エリカはと言うと、既に爆睡していた。

シャルロットも手紙を読みながら寝落ちした様であつた。

「はあ、やっと一息つける。」

ハンナはそう言つて、大きく息を吐くと、自分の座席にもたれかかつた。

「……あれ?」

ふと外を見ると、遠くの方に明るい場所が見える。オレンジ色に地表近くが光り、上空へ向けて数本の光の束が投げかけられている。

「……連合軍の夜間空襲かな。」

ハンナはポツリと呟いたが、他の全員は寝ているのもあつて、それを確かめる術は無い。ただ、彼女はぼんやりとその光景を見つめることしかできなかった。

「お父さん、お母さん、元気かな?」

彼女は、家族に手紙を書こうと思ひ立つたのだつた。